

寂恵本 拾遺和歌集 上一冊

担当者 阿 部 秋 生・前 田 裕 子

本書は、山岸徳平博士旧蔵書で、昭和四十五年五月二十五日附で、重要文化財に指定されているものである。今回、本学に移譲されて、「山岸文庫」として本学図書館に襲蔵されているものの一つである。

一、拾遺和歌集の伝本

『拾遺和歌集』の諸伝本に関しては、すでに諸家の調査・研究が刊行されている。それらによれば、今日知られている諸本の殆どすべてが、定家筆本系統のものである。このような事態を将来した大きな理由の一つは、藤原定家が、少くとも四回——貞応元年七月八日（永正十五年書写本奥書）、貞応二年九月十一日（貞応二年本奥書）、寛喜三年九月十二日（明月記）、天福元年仲秋（高松宮家本奥書）の四回にわたって書写したことにあるだろうとされている。

さらに、この定家筆本の中の大部分は、天福元年仲秋書写の天福本系統である。その理由は、『拾遺和歌集』の場合、歌学の家としての二条家と冷泉家とが、共にこの天福本を伝領し、家本として尊重したことによるのであろうといわれる。

右のような伝本状況から、定家筆本系統の諸本を流布本乃至は基準本とし、これと異なる本文を有するものを異本系統として立てるわけである。これら現存諸本の重なるものを、分類表示すると次のようになる。

A 定家筆本系統

(1) 貞応本

貞応元年書写本の現存するものは知られていない。現存するのは貞応二年書写本だけである。天福本と比較すると、勘物・頭註等が少ないこと、奥書に、拾遺抄の歌数、「集不見哥」などの記事のないことが特徴である。貞応元年書写本がかつて存在したことは、永正十五年書写本の長舜の識語のあとに、

重以京極黃門禪門眞筆令校合之爰

聊有相違事仍以朱注付之 件本奥書云

貞応元年七月八日申一点重以家本終

書写之功為後学之証本也

戸部尚書藤在判

同十六日令校合此直付落字畢

とあることによる。貞応二年書写本の奥書には次のようにある（中院家旧蔵本）。

貞応二年九月十一日辰時以家本重書写之

戸部尚書藤在判

同夕令読合了書入落字

現存伝本の主なものに次の如きがある。

(イ) 高松宮家本（寛永二十年書写）

(ロ) 中院家旧蔵本（京都大学図書館蔵、大正十六年冷泉為満奥書）

(2) 天福本

① 冷泉家流

定家筆の原本は、冷泉家に現存しているといわれる。この原本を忠実に書写したものが高松宮家本（①のイとは別）・中院通茂本であり、同じくこの原本から鎌倉期に書写したものが伝慶融筆本・観慧筆本である。これらの諸本の奥書には、

天福元年仲秋中旬以七旬有余之

盲目重以愚本書之八ヶ日終功

翌日令誦合訖

此本付属大夫為相

類齡六十八 桑門融覺判

此集世之所伝無指証本仍以数多旧

本校合彼是取其要猶非無不審

以下「算合抄之証本」という項目をたてて、拾遺抄の歌数、「集不見哥」などを記す。
現存伝本の主なものに次の如きがある。

- (イ) 伝慶融筆本（宮内庁書陵部蔵）
- (ロ) 観慧筆本（正応三年書写、宮内庁書陵部蔵）
- (ハ) 高松宮家本（江戸切期書写）
- (ニ) 中院通茂筆本（延宝五年書写、京都大学附属図書館蔵）
- (ホ) 家仁親王筆本（宮内庁書陵部蔵）

② 二条家流

この流の本は、冷泉家流の本とはほぼ同じ奥書を有するが、小異がある。すなわち右冷泉家流奥書の冒頭部の、
(a) 「八ヶ日終功」の後に、「為授鐘愛之孫姫也」とある。
(b) 「此本付属大夫為相／類齡六十八 桑門融覺判」がない。

この点に関しては、冷泉家流本の中、前記の中院通茂本（臨模本、家仁親王筆の奥書において、「為授鐘愛之孫姫也」を削り消し、その上に、「此本付属大夫為相」と記し、その下に、「類齡六十八 桑門融覺判」と記してあることによれば、融覺（為家、が六十八歳（文永二年／＼二六五）の時、定家筆本の奥書に訂正・加筆したもので、その点からいえば、二条家流の奥書が天福本本来の形であったと考えられる。ただし、二条家流本のこの奥書を有する本の中には、奥書だけを、他系統本文の本に移記したものもあるらしく、奥書は天福本のそれであるが、本文は天福本のそれから離れてしまっているものが多い。このような奇異な結果を生じたのは、二条家が、歴とした天福本を相伝していなかったことに由来するのではないかといわれている。

現存伝本の主なものに次の如きがある。

- (イ) 伝定為法印筆本（静嘉堂文庫蔵）
 - (ロ) 浄弁筆本（嘉暦二年書写、尊経閣蔵）
 - (ハ) 二条為明筆本（寛元三年六月真觀奥書、日本大学図書館蔵）
 - (ニ) 東常縁筆本（文明二年書写、宮内庁書陵部蔵）
- 天福本にもっとも近い本文を有する。

- (3) 無年号本
 - (ホ) 為重本（康安元年為重奥書、宮内庁書陵部蔵、京都大学図書館所蔵菊亭家旧蔵）

定家本の一つとみられるが、定家の書写年号の記されていない本である。現存伝本の主なものに次の如きがある。

- (イ) 足利義尚所持本（文明十二年校合北野天満宮本奥書）
- (ロ) 北野本（北野克氏蔵、重要文化財）
- (ハ) 片桐本（片桐洋一氏蔵）

B 異本系統

形態・内容において、定家の手を経ていないと考えられる諸伝本である。

- (イ) 十五冊本八代集本（伝堀河宰相具世筆、宮内庁書陵部蔵）
- (ロ) 多久市立図書館本（室町中期写）
- (ハ) 天理本甲本
- (ニ) 天理本乙本
- (ホ) 伝二条為忠筆本（卷十四零本、卷子本、鎌倉末期書写、北野克氏蔵）
- (ヘ) 北野天満宮本（室町中期写）
- (4) (イ)は、異本系統中の第二系統とすべきかといわれる。

二、寂恵本拾遺和歌集

本書は、右の如き諸本群の中のどこに位置すべきかを検討すべきだが、その前に、まずその形態の概要を述べる。

本書は、巻一〜十の零本である。縦二三・三厘、横一六・〇厘の綴葉装の写本である。

桐の外箱の蓋中央には金の雲形のある短冊様の紙片（縦二一・〇×横七・四厘）に、「拾遺集」とあり、肩に「寂恵筆」とある。箱には紺色の平織の紐が附けてある。中は、まず白紙に包み、包紙の表面に「拾遺和詞集／桑門寂恵筆」と二行（二行目は約一字下げ）に記す。その中は、二枚の絹布で本書を包んである。

表紙は、表表紙裏表紙共に紺地に金の切箔をおき、金銀泥で雲・草木文様（表は花木・裏は笹）を描く。表紙の左上に赤地に金の雲と木の葉の文様と墨の水文様のある題簽（縦一一・七×横三・三厘）があり、これに「拾遺集」と墨書する。江戸時代の補修とされている。

見返しは、表裏共に金、表見返しの上に、「安倍寂恵法師拾遺集□□」という「琴山」の印のある極札が添付してある。本文の料紙は斐紙、陽に焼けて薄茶色になり、時に水よごれの跡もある。全体は八括りで、綴糸は橙色である。第一括は七枚（これに表紙二丁）、第二括は、九枚で、これのはじめに一丁貼りつけてある。「書き落として補ったものか」（山岸氏）といわれるが、そのようには考えられない。第三括から第七括までは九枚づつ、第八括も九枚（これに裏表紙二丁）であるが、この括の最初に一枚（二丁分）が、綴目近くに紙を補って、裏表紙の端でとめてある。第二括の場合と相応じている綴じ方のように思われる。従って総数は、表裏表紙を除き一四三丁（二八六頁）である。

本文は、第一丁才を白紙とし、第一丁ウからはじめ、最初に各巻の内題「拾遺和歌集巻第一」（巻三〜十は「和詞集」）の如く記し、一面九行、歌は一首二行書（上・下の句で分ける）、詞は歌より約一〜二字分下げに記す。各巻ごとに頁、又は丁を変えて内題を記し、巻によって、巻末に白紙一頁をおくことがある。巻第十を第一四二丁ウ（八行）で終り、第一四二丁才に、

この集順教御房にこまかに
よみきかせまいらせ候ぬ

判

とあり、その裏に

斯集雖有一部書写之志老病

右筆不合期之間上帖之内第一第

二第十等染愚筆其外所用他

筆也但於其說者傳受之分無

所殘所奉授糟屋賢郎也

桑門寂恵（花押）

とあり、その後の第一四三丁オ・ウは遊紙となつて、裏表紙見返しにつづく（口絵2・3参照）。

本書には、数通の寂恵伝に関するメモ風のもののその他が附属して残されているが、「重要文化財指定書」および指定通知の公文が主たるもので、本書の伝来等を知りうる資料はない。

寂恵に関しては、久保田淳氏が、「順教房寂恵について」（『国語と国文学』昭和三十三年十一月号）に、基本的な調査結果を報告している。『勅撰作者部類』に、「法師。俗名安倍範光。号順教」とある。「範光」は「範元」の誤写であることは、『吾妻鏡』『寂恵法師文』（尊経閣）相互の關係から認めうることである。「範元」の名は、『尊卑分脈』『安倍氏系図』には見えないが、「祖父大監物宣賢」（吾妻鏡）とある。「宣賢」は、続類從本『安倍氏系図』に見えるから、晴明流の安倍氏と認めていいだろう。「順教」は房の名である。『吾妻鏡』によると、鎌倉に下つて幕府に仕えていた陰陽師であつたが、むしろ歌人として知られていたらしい。將軍宗尊親王の身辺にいた歌人たちの一人であつた。文永八年、為家に師事したが、四年ほどで為家が歿したので、以後嫡男為氏に師事した。弘安元年十二月二十七日奏覧の『続拾遺和歌集』をめぐつて、寂恵は為氏にかなり激しい悪感情をもつようになったらしく、二条派とはいいがたいもののである。歿年は明らかでないが、『寂恵法師歌語』によると、正和三年（一二三四）にはまだ健在のようである。あるいは、後半生には、冷泉家に親近していたかと思われる節々が見える（『柳風和歌抄』『拾遺風躰和歌集』等）。出家したのは、文永八年四月四日以前ということしかわからない。

寂恵の歌として遺るものは、『新後撰和歌集』以下の勅撰六集に九首（新後撰1、玉葉2、続千載3、風雅1、新拾遺1、新続古今1）、私撰四集に二四首（柳風4、拾遺風躰5、人家5、懷紙卷10）にすぎない。

本書の書写年次は奥書にもない。が本書の識語とほぼ同じものをもつ写本が、宮内庁書陵部所蔵の寂恵本『古今和歌集』上巻で、その末尾に（口絵4参照）、

古今一部順教御房に「こまかによみきかせ」まいらせ」候ぬ」

（花押）

とあり、花押もある。下巻末は、破損甚しく、大半の文字が見えないが、上巻末と同じ花押がはっきりとあり、その前に「きかせ□いらせぬ」（候）の有無は不明）とよみうる文字が残っている。順教房寂恵が、古今、拾遺共に同一人から伝授をうけたことを意味するかと思われ、この伝授者を、三条西公正博士は二条為氏とされ（寂恵本『古今和歌集』解題）、久曾神昇博士は京極為教とされる（『古今和歌集成立論』）が、いずれとも断定しがたいと考えられる。

この古今集の識語の次丁才に次の如き奥書がある。

弘安元年十一月上旬

以証本書写訖

桑門寂恵

此集読授英倫訖

（花押）

この筆蹟の筆者は、寂恵本拾遺集の奥書と同一人と認められるもので、この寂恵本古今集と寂恵本拾遺集とが、密接な関係、つまり一連の伝授関係のものであることを推測せしめる。そこでこの寂恵本古今集の奥書にいますこし検討を加えてみる必要があるだろう。

この古今集の奥書の「弘安元年……桑門寂恵」と「此集読授英倫訖」とは、同筆ではあるが、文字の大小もあり、同時の筆とは断定しかねるところがある。つまり、この古今集を寂恵が書写したのは弘安元年であるが、此集を「英倫」に「読授」したのは、弘安元年以後、何年か時を距てているとみうる可能性がある。花押が「此集……」に接して書かれている所以もそこにあるだろう。つまり、この花押は、寂恵がこの古今集を書写したことを保障する花押ではなく、前頁の「古今一部……」の後の花押と同じく、英倫に読授したことを保障する意味のものかと考えられる（口絵5・6参照）。

もう一段推測を進めるならば、寂恵は、弘安元年十一月上旬、おそらくは師家の「証本」を書写することを許されて、その書写

を記り、その写本（寂恵本古今集）をもって、師家の説の伝授をうけ、これをこの写本に書き入れた、その末尾にその師が、「古今一部順教御房に……」と記して、伝授の保障として花押を加えたのではあるまいか。その後、おそらくは何年かの後であろう、寂恵が英倫に「読授」、即ち師説を伝授し、自分が伝授をうけた時の本をもってそのまま英倫に伝授するに当って、「此集読授英倫訖（花押）」と改めて記したのではなからうか。とするならば、寂恵が師説の伝授をうけたのも、この本を書写した「弘安元年十一月上旬」の前にしても、後にしても、程遠からぬ時期であらうかとも考えうる。為氏の「続拾遺和歌集」撰進がこの弘安元年十二月二十七日で、このことに絡んで、寂恵は為氏を恨むことになるのだが、その直前の時期に、この寂恵本古今集の伝授のことを想定することは、その師家を為氏とするか否かは別として、いささか不安定な感を免れないが、この古今集の奥書、識語から推測すると、「弘安元年十一月上旬」は、書写年時であると共に、伝授をうけた年時を意味するのではないかと思われる。

このような想定をしておいて、寂恵本拾遺集の奥書、識語に戻ってみると、この奥書は、寂恵本古今集の奥書、「弘安元年……」と「此集……」との二つを一つにまとめた内容をもつものである。従って、その「桑門寂恵」の下部にある花押も、「糟屋賢郎」に「無所残」「奉授」ったことを保障する意味のものとみるべきだろう。また、この奥書の前頁に、「この集順教御房に……」と、寂恵本古今集とはほぼ同じ識語が寂恵の筆蹟で記され、その後、師家の花押はないが、「判」とあることは、寂恵の野心的な作為とまで見る必要はなさそうに思われる。とすると、この文面からみて、寂恵は、拾遺集の伝授をも、同じ師家からうけたものと思われ、それがこの奥書に、「但於其説者伝受之分無所残……」となるものであらう。おそらく、古今集の伝授の場合のように、寂恵は、師家の証本を書写して、その本によって師説の伝授をうけたのではなかったらうか。伝授の終わった時、師家は、その本の奥に「この集順教御房に……」と識語を書き花押を加えたのであらう。さらに推測すれば、その本には、寂恵本古今集ほどではないにしても、師説が書き入れられてあったのではないかと思われる。が、そういう師説を書き入れた本を、「老病……」という理由はあるにしても、一部分にもせよ、「他筆」で書写させることをするかどうかという点で、この書き入れ存在を推測することは、行きすぎかもしれない。だが、これも推測にすぎないが、寂恵が拾遺集の伝授をうけた時期も、寂恵本古今集を書写した「弘安元年十一月上旬」と割に近い時期であったのではないかとも思われる。しかし、その師説を「糟屋賢郎」なる者に伝授したのは、それから何年か後になることであらうから、寂恵本拾遺集の書写年代は、弘安元年十一月よりはかなりあとであらうということになる。因に、寂恵本古今集の「英倫」、同拾遺集の「糟屋賢郎」に当る人物は、目下のところ不明とすべきもののようである。また、寂恵本古今集の「古今一部……」のあとにある師家の花押も、目下のところ誰のものと比定できなかった。

ここで、一言加えておきたいのは、本書奥書の「桑門寂恵」の下部の花押についてである。この花押の筆画は、寂恵本古今集の「此集読授英倫訖」の傍にある花押と同じものであることは確実であり、その故に寂恵の花押と認められたと考えてよいであろう。このことは、この両本（古今集・拾遺集）の筆蹟、特に奥書の筆蹟の筆癖に共通するところがあることによって、さらに確められている。

しかし、本書の花押を、寂恵本古今集の花押と比較すると、何がしの不審な点が見える。というのは、本書の花押には、寂恵本古今集の花押にはない筆画が加えられていることである。この余分の筆画——横に一本と縦に一本と右向きにはみ出す弧線と三本あるように思われる——は、花押の本来の筆画より、少しく墨色が薄く、筆画のようにもみえ、また十文字と弧線とで、花押を抹消したものとみられぬでもない。いずれにしても、この余分の筆画が何を意味するものか、判定に苦しむが、全く意味のないよごれの如き性質のものではないように思われる（口絵3・6参照）。

右のような事実と当面して、さらに寂恵本古今集の花押と比較してみると、形の大小のみならず、本書の花押の筆画の線は、寂恵本古今集のそれよりぎこちなく、精細をいささか欠くようにも思われる。このような印象的な比較は意味のないことにもなるが、前記の余分の墨色の異なる筆画の意味とあわせてみると、少くとも、一応問題のあることを指摘しておくべきかと思われる。筆蹟に関しては、特に疑うべき節は見当らないだけに不審である。将来の検討すべき課題とする。

以下本文に就いて述べる。

① 歌数

本書の本文は、前述の如く第一丁ウから書きはじめられている。巻一〜十の歌数は下表の通りである。この歌数は、定家本（中院通茂筆本）の歌数と同じである。ただし、夏一一八「さみたれは」の下句に、誤って一一九「うたて人」の下句を記してしまったので、この上句下句の行間に、一一八の下句と一一九の上句とを細目の文字で書きこんである。筆蹟に変わりはないから、巻二の筆者のしわざと考えられる。

巻数	巻名	歌数	累計
1	春	78	78
2	夏	58	136
3	秋	78	214
4	冬	48	262
5	賀	38	300
6	別	53	353
7	物名	78	431
8	雑上	77	508
9	雑下	67	575
10	神楽歌	45	620

② 肩書

本書の歌の肩又は頭に、「抄」「少」「少雑上」「少佳上」「少同」「万葉」「万」「古今」「古」「後撰」又はこの二・三を組合せたものの記入されていることがある。「少」は「抄」の略号、「少佳上」は「抄雑上」、「少同」はその前の歌に「抄雑上」「少佳上」の如きがあるのをうけている略号である。「抄」はいうまでもなく「拾遺和歌抄」の意である。つまり、拾遺抄、万葉集、古今集、後撰集との重複歌であることの註記である。この註記は、他の定家本にも往々にしてみえるものであるが、本書のそれと定家本（中院通茂筆本）のそれとを比較すると多少の異同がある。その異同を整理すると次のようになる。

a 本書にあり、定家本にない肩書（「21オ」等は本書の丁数、「97」等は定家本の歌番号である）。

万—21オ・97

後撰—31オ・144、52オ・246

古—84ウ・384

b 定家本にあり、本書にない註記。

少—9ウ・41、25オ・118、70オ・319、77オ・346

後撰—48オ・225

古—98オ・450

c 意味するところに変りはないが、本書と定家本とで記号が異なるもの。これは、本書では「少同」とあるものが、定家本では「少佳上（下）」となっているものと、その逆のものとである。

84ウ・383、102ウ・469、113ウ・514、113ウ・515、118オ・537、120ウ・545、122オ・552

次に本文の他本との異同を調査し、本書の本文の系統を弁別すべきであるが、本書が上巻のみで下巻を欠き、その奥書の状態を知ること也不可能であり、また拾遺集諸本の調査が未了であり、一応の結果を出すことにも無理があり、さらに、片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究』（昭和四十五年十二月、桜楓社刊）があるので、その研究の調査結果を借用する。

右によれば、本集の本文は大体において、定家本系統中の天福本と一致するが、

(1) 天福本以外の定家本のもっている特徴的な本文をもっているところがある。

(2) 異本系統の本文と共通するところもある。

従って、大体において定家本系統中の一本とは認めうるが、その中のいずれに所屬せしめるべきかは判定しかねる。——ということであろうか。

本書は、以上の如き本文であって、定家本の中であるとしても、特異な位置をとるものであり、北野克氏所蔵本などと共に、拾遺和歌集の研究にとって、貴重な資料としての存在理由があるものと考えられる。

本書は、片桐氏の前記著書中の定家本の校異に定家本（中院通茂本）との異同が註記されているが、全文が紹介されたことはないので、以下できうるかぎり活字化しておく。大方の参考になれば幸いである。

〔白紙〕

拾遺和歌集卷第一

春

平さたふんか家哥合によみ侍ける

壬生忠岑

1

抄

はるたつといふはかりにやみよしのゝ
やまもかすみてけさはみゆらん

承平四年中宮の賀し侍ける時の屏風
のうた

紀 文韓

たゝ

2

抄

はるかすみたてるをみればあらたまの
としは山よりこゆるなりけり

かすみをよみ侍ける

山邊赤人

3

きのふこそとしはくれしかはるかすみ
かすかの山にはやたちにけり

冷泉院東宮におはしましける時哥たて
まつれとおほせられければ

源 重之

4

よしの山みねのしらゆきいつきえて
けさはかすみのたちかはるらむ

延喜御時月次御屏風に

素性法師

1才』

5 抄

あらたまのとしたちかへるあしたより
またるゝものはうくひすのこゑ

天曆御時哥合に

源 順

6

こほりたにとまらぬはるのたにかせに
またうちとけぬうくひすのこゑ

題しらす

平 祐拳

7

抄

はるたちてあしたのはらのゆきみれば
またふるとしの心ちこそすれ

さたふんか家の哥合に

みつ ね

8

少

春たちてなをふるゆきはむめのはな
さくほともなくちるかこそみる

題しらす

よみ人しらす

9

わかやとのむめにならひてみよしのゝ
山のゆきをも花とこそみれ

天曆十年三月廿九日内裏哥合に

中納言朝忠 抄中務

2才』

10

少

うくひすのこゑなかりせはゆきゝえぬ
山さといかてはるをしらまし

うくひすをよみ侍ける

大伴家持

2ウ』

3才』

万葉

11 うちきらしゆきはふりつゝしかすかに
わかいゑのそのにうくひすそなく

3ウ

題しらす

柿本人麿

万古今

12 むめのはなそれとも見えずひさかたの
あまきるゆきのなへてふれゝは

題しらす

人麿

5オ

延喜御時宣旨にてたてまつれる哥の

なかに

つらゆき

少

13 むめかえにふりかゝりてそしらゆきの
花のたよりにおとるへらなる

おなし御時御屏風に

4オ

みつね

少

14 ふるゆきにいろはまかひぬむめのはな
かにこそにたるものなかりけれ

冷泉院御屏風のゑにむめのはな

ある家にまらうときたるところ

平兼盛

少

15 わかやとのむめのたちえや見えつらん
おもひのほかに君かきませる

斎院御屏風に

4ウ

みつね

16

少

かをとめてたれおらさらむゝめのはな
あやなしかすみたちなかくしそ

もゝそのにすみ侍ける前斎院屏風

に つらゆき

少

17 しろたへのいもか衣にむめのはな
いろをもかをもわきそかねつる

題しらす

18 あすからはわかなつまむとかたをかの
あしたのはらはけふそやくめる

恒佐右大臣の家の屏風に

つらゆき

少

19 野邊みれはわかなつみけりむへしこそ
かきねのくさもはるめきにけれ

わかなを御覽して

圓融院御製

少 雑上

20 かすかのおほくのとしはつみつれと
おいせぬものはわかなゝりけり

題しらす 大伴家持

万

21 はるのゝにあさるきゝすのつまこひに
をのかありかを人にしれつゝ

おほきさいのみやに宮内といふ人のわらはなりける
時たいこのみかとの御まへにさふらひけるほとに

おまへなる五葉にうくひすのなきければ

正月はつねの日つかうまつれる

少

22 まつのうへになくうくひすのこゑをこそ
はつねの日とはいふへかりけれ

6オ

23 少 題しらす たゝみね
子日するのへにこまつのなかりせば
ちよのためしになにをひかまし

入道式部卿のみこの子日し侍ける所
に 大中臣よしのふ

24 少
千とせまてかきれるまつもけふよりは
きみにひかれてよろつよやへむ

延喜御時御屏風に水のほとりに梅
花見たる所

つらゆき

25 少
むめのはなまたちらねともゆくみつの
そこにうつれるかけそみえける

題しらす よみ人しらす

26 少
つみたむることのかたきはうくひすの
こゑするのへのわかなゝりけり

27 少 後撰
むめのはなよそなからみむわきもこか
とかむはかりのかにもこそしめ

28 万 少
そてたれていさわかそのにうくひすの
こつたひちらすむめのはなみむ

兵部卿元良親王

29 少
あさまたきおきてそみつるむめのはな
よのまの風のうしろめたさに

30 少 みつね
ふく風をなにとひけんむめのはな
ちりくる時そかはまさりける

31 大中臣よしのふ
にほひをはかせにそふともむめのはな
いろさへあやなあたにちらすな

よみ人しらす

32 ともすれはかせのよるにそあをやきの
いとほなな／＼みたれそめける

屏風に 大中臣能宣

33 ちかくてせいろもまされるあをやきの
いとほよりてそみるへかりける

題しらす 凡河内躬恒

34 少
あをやきのはなたのいとをよりあはせて
たえずもなくかうくひすのこゑ

よみ人しらす

35 少
はなみにはむれてゆけともあをやきの
いとのもとにはくる人もなし

子にまかりをくれて侍けるころ東山
にこもりて

中務

36 少
さけはちるさかねはこひしやまさくら
おもひたえせぬはなのうへかな

題しらす

6ウ

7オ

7ウ

8オ

8ウ

37

よしの山たえすかすみのたなひくは
ひとにしられぬ花やさくらん

天曆九年内裏哥合に

よみ人しらす

38

さきさかすよそにてもみむやまさくら
みねのしら雲たちなかくしそ

題しらす

39

ふくかせにあらそひかねてあしひきの
やまのさくらはうつろひにけり

菅家万葉集中

40

あさみとりのへのかすみはつゝめとも
こほれてにほふはなさくらかな

題しらす

よみ人しらす

41

よしの山きえせぬゆきと見えつるは
みねつゝきさくさくらなりけり

天曆御時麗景殿女御と中将更衣

と哥合し侍けるに

清原元輔

42

はなかすみたちなへたてそはなさかり
みてたにあかぬ山のさくらを

平さたぶんか家の哥合に

たゝみね

43

はるはなをわれにてしりぬはなさかり

9ウ』

こゝろのとけき人はあらしな

賀御屏風に

44

さきそめていくよへぬらんさくらはな
いろをは人にあかす見せつゝ

天曆御時御屏風

たゝみ

45

はるくれはまつそうちみるいそのかみ
めつらしけなきやまたなれとも

題しらす

在原元方

46

はるくれはやまたのこほりうちとけて
人のこゝろにまかすへらなり

承平四年中宮の賀し給ける時の
屏風に

斎宮内侍

斎宮内侍

47

はるのたを人にまかせてわれはたゝ
花に心をつくるころかな

宰相中将敦忠朝臣家の屏風に

つらゆき

48

あたなれとさくらのみこそふるさとの
むかしなからのものには有けれ

斎院屏風に山みちゆく人ある所

伊勢

11オ』

10ウ』

49 少

ちりちらすきかまほしきをふるさとの
花みてかへる人もあはなむ

題しらす

よみ人しらす

50 少

さくらかりあめはふりきぬおなくは
ぬるとも花のかけにかくれん

もとすけ

51 少

とふ人もあらしとおもひしやまさにと
花のたよりに人めみるかな

圓融院の御時三尺御屏風に

平 兼盛

52

花のきをうへしもしるく春くれは
わかやとすきてゆく人そなき

題しらす

よみ人しらす

53 少

さくらいろにわか身はふかくなりぬらん
心にしめてはなをおしめは

権中納言義懷家のさくらの花おし

む哥よみ侍けるに

藤原長能

54 少

身にかへてあやなく花をおしむかな
いけらはのちのはるもこそあれ

題しらす

よみ人しらす

55

見れとあかぬ花のさかりにかへるかり
なをふるさとのはるやこひしき

56

ふるさとのかすみとひわけゆくかりは
たひのそらにやはるをくらさむ

天曆御時御屏風に

藤原清正

57 少

ちりぬへき花みるときはすかのねの
ななきはる日もみしかよりけり

題しらす

よみ人しらす

58 少

つけやらむまにもちりなはさくらはな
いつはり人にわれやなりなむ

屏風に

よしのふ

59 少

ちりそむる花を見すてゝかへらめや
おほつかなしといもはまつとも

題しらす

よみ人しらす

60

見もはてゝゆくとおもへはちるはなに
つけてこゝろのそらになるかな

延喜御時ふちつほの女御哥合の哥

に

61 少

あさことにわかはくやとのにはさくら
はなちるほとはてもふれてみむ

あれはてゝ人もはへらさりける家に

さくらのさきみたれて侍けるをみて

恵慶法師

62 少

あさちはらぬしなきやとのさくらはな

11ウ』

12オ』

12ウ』

13オ』

13ウ』

心やすくや風にちるらん

きたの宮のもきの屏風に

つらゆき

63

はるふかくなりぬとおもふをさくらにはな
ちるこのもとはまたゆきそふる

亭子院哥合に

64

さくらちるこのしたかせはさむからて
そらにしられぬゆきそふりける

題しらす

65

あしひきのやまちにちれるさくら花
きえせぬはるのゆきかとそみる

天曆御時哥合に

66

あしひきの山かくれなるさくらにはな
ちりのこれりとかせにしらるる

題しらす

67

いはまをもわけくるたきの水をいかて
ちりつむはなのせきとゝむらん

天曆御時哥合に

68

はるふかみあてのかはなみたちかへり
みてこそゆかめやまふきのはな

ぬてといふ所に山吹のはなのおもしろ

くさきたるを見て

惠慶法師

69

やまふきの花のさかりにゐてにきて
このさと人になりぬへきかな

屏風に もとすけ

70

ものもいはてなかめてそふるやまふきの
花に心そうつろひぬらん

題しらす

71

さはみつにかはつなくなりやまふきの
うつろふかけやそこにみゆらむ

72

わかやとのやへやまふきはひとへたに
ちりのこらなむはるのかたみに

亭子院哥合に

73

はなのいろをうつしとゝめよかゝみやま
はるよりのちのかけやみゆると

題しらす

74

はるかすみたちわかれゆくやまみちは
花こそぬさとちりまかひけれ

75

としのうちはみなはるなかくれなゝむ
花みてたにもうき世すくさむ

延喜御時春宮御屏風に

つらゆき

15才

14才

14ウ

15ウ

16才

76 少

かせふけはかたもさためすちるはなを
いつかたへゆくはるとかはみむ

おなし御時月次御屏風に

77 少

花もみなりぬるやとはゆくはるの
ふるさとこそなりぬへらなれ

閏三月はへりけるつこもりに

78 少

つねよりものとけかりつるはるなれと
けふのくるゝはあかすそ有ける

拾遺和歌集卷第二

夏

天曆御時の哥合に

大中臣能宣

79

なくこそはまたきかねとせみのはの
うすきころもはたちそきてける

屏風に

したかふ

少

わかやとのかきねやはるをへたつらん
夏きにけりとみゆるうの花

冷泉院の東宮におはしましける時

百首歌たてまつれとおほせられければ

源 重之

81

少

花の色にそめたもとのおしければ
ころもかへうきけふにもあるかな

夏のはしめによみ侍ける

盛明のみこ 延木才十五源氏
母源周子号十五宮

82 少

はなちるといとひしものを夏ころも
たつやをきと風をまつかな

百首歌中に

しけゆき

83

少 雑上

なつにこそさきかゝりけれふちの花
まつにとのみもおもひけるかな

圓融院御時屏風哥

平かねもり

84

すみよしのきしのふちなみわかやとの
まつのこそ多にいろはまさらし

したかふ

85

むらさきのふちさく松のこそ多には
もとのみとりも見えずそ有ける

延喜御時飛香舎にて藤花宴侍

少 雑上

ける時に

小野宮太政大臣清慎公

86

うすくくみたれてさけるふちのはな
ひとしきいろはあらしとおもふ

題しらす

躬 恒

87

てもふれておしむかひなくふちの花
そこにくつればなみそおりける

たこのうらの藤花をみ侍て

柿本人麿

18 才

16 ウ

17 才

18 ウ

17 ウ

19 才

88

万 たこのうらのそこさへにはふゝちなみを
かさしてゆかむみぬ人のため

山里の卯花にうくひすのなき侍けるを

平 公誠從五下周防守

89

少 うの花をちりにしむめにまかへてや
夏のかきねにうくひすのなく

題しらす よみ人しらす

19ウ』

90

少 卯花のさけるかきねはみちのくの
まかきのしまのなみかとそみる

延喜御時月次御屏風に

みつね

91

少 神まつるう月にさけるうのはなは
しろくもきねかしらけたるかな

つらゆき

92

神まつるやとのうの花しろたへの
みてくらかとそあやまたれける

題しらす よみ人しらす

20オ』

93

山かつのかきねにさけるうのはなは
たかしろたへの衣かけしそ

時わかすふれるゆきかとみるまでに

後撰

かきねもたわにさけるうのはな

はるかけてきかむともこそおもひしか

95

やまほとゝきすをそくなくらむ

96 少

はつこゑのきかまほしさにほとゝきす
夜ふかくめをもさましつるかな

夏山をこゆとて

久米廣繩

97 少

いゑにきてなにをかたらむあしひきの
山ほとゝきす一こゑもかな

延喜御時御屏風に

つらゆき

98

山さとしる人もかなほとゝきす
なきぬときかはつけにくるかに

題しらす よみ人しらす

21オ』

99 少

やまさとにやとらさりせはほとゝきす
きく人もなきねをやなまし

天曆御時哥合に

坂上望城是則男

100

ほのかにそなきわたるなるほとゝきす
みやまをいつるけさのはつこゑ

平 兼盛

101 少

みやまいてゝ夜はにやきつるほとゝきす
あか月かけてこゑのきこゆる

寛和二年内裏哥合に

右大将道綱母

21ウ』

102 少

みやこ人ねてまつらめやほとゝきす

いまそ山へをなきていつなる
女四のみこの家哥合に

坂上是則

山かつと人はいへともほとゝぎす
まつはつこゑはわれのみそきく
天曆御時の哥合に

壬生忠見

さよふけてねさめさりせはほとゝぎす
人つてにこそきくへかりけれ
おなし御時の御屏風に

伊勢

後撰
ふたこゑときくとはなしにほとゝぎす
夜ふかくめをもさましつるかな
北宮のもきの屏風に

源公忠朝臣

ゆきやられて山ちくらしつほとゝぎす
いまひとこゑのきかまほしさに
敦忠朝臣の家の屏風に

つらゆき

このさとにいかなる人かいゑゐして
山ほとゝぎすたえすきくらむ
延喜御時哥合に

よみ人しらす

さみたれはちかなるらしよとかはの

あやめのくさもみくさおひにけり

屏風に 大中臣能宣

きのふまでよそにおもひしあやめくさ
けふわかやとのつまとみるかな
題しらす

よみ人しらす

けふみれはたまのうてなもなかりけり
あやめのくさのいほりのみして

延喜御製

あしひきの山ほとゝぎすけふとてや
あやめのくさのねにたてゝなく

よみ人しらす

たかそてにおもひよそへてほとゝぎす
はなたちはなのえたになくらん

天曆御時御屏風によとのわたりする人
かける所に

壬生忠見

いつかたになきてゆくらんほとゝぎす
よとのわたりのまたよふかきに

しけることまこものおふるよとのには
つゆのやとりを人そかりける

小野宮太政大臣の家の屏風にわたりした
る所に郭公のなきたるかたあるに

つらゆき

かのかたにはやこぎよせよほとゝぎす

みちになきつと人にかたらん

きたふんか家の哥合に

みつね

116

ほとゝきすをちかへりなけうなひこか
うちたれかみのさみたれのそら

題しらす

よみ人しらす

117

なけやなけたかたの山のほとゝきす
このさみたれにこゑなおしみそ

118

さみたれはいこそねられぬほとゝきす
よふかくなかむこゑをまつとて

119

うたて人おもはんものをほとゝきす
よるしもとかわかやとになく

大伴坂上郎女

120

少佳上

ほとゝきすいたくなゝきそひとりめて
いのねられぬにきけはくるしも

中務

121

少

夏のよの心をしれるほとゝきす
はやもなかなむあけもこそすれ

122

なつのよはうらしまのこかはこなれや
はかなくあけてくやしかるらむ

延喜御時中宮哥合

よみ人しらす

123

夏くれはふかくさやまのほとゝきす
なくこゑしけくなりまさるなり

24ウ』

春宮にさふらひけるゑにくらはし山に
郭公とひわたりたる所

藤原實方朝臣

124

少
さ月やみくらはし山のほとゝきす
おほつかなくもなきわたるかな

題しらす

よみ人しらす

125

万少
ほとゝきすなくや五月のみしか夜も
ひとりしぬれはあかしかねつも

西宮左大臣の家の屏風に

源順

126

少
ほとゝきすまつにつけてやともしする
人も山へによをあかすらん

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

127

少
五月やまこのしたやみにとす火は
しかのたちとのしるへなりけり

九条の右大臣の家の。屏風に

賀の
平兼盛

128

少
あやしくもしかのたちとの見えぬかな
をくらの山にわれやきぬらん

女四のみこの家の屏風に

みつね

129

少
ゆくすゑはまたとをけれとなつやまの

26才』

26ウ』

このしたかけそたちうかりける

延喜御時御屏風に

つらゆき

27才

なつやまのかけをしけみやたまほこの

みちゆき人もたちとまるらむ

河原院のいつみのもとにすゝみ侍て

恵慶法師

少

松かけのいはるのみつをむすひあけて

なつなきとしとおもひけるかな

家にさきて侍けるなてしこを人のかり

つかはしける

伊勢

27ウ

132

いつこにもさきはすらめとわかやとの

山となてしこたれにみせまし

少

そこきよみなかるゝ河のさやかにも

はらふることを神はきかなむ

藤原長能

少

さはへなすあらふる神もをしなへて

けふはなこしのはらへなりけり

よみ人しらす

135

もみちせはあかくなりなむをくらやま

秋まつほとの名にこそ有けれ

28才

140

少

やへむくらしけるやとのさひしきに

人こそ見えねあきはきにけり

題しらす

安貴王

30才

139

少

おきのはのそよくをとこそあきかせの

ひとにしらるゝはしめなりけれ

河原院にてあれたるやとに秋来と

いふこゝろを人／＼よみ侍けるに

恵慶法師

つらゆき

138

秋はきぬたつたの山も見てしかな

しくれぬさきにいろやかはると

延喜御時御屏風に

29ウ

137

少

なつこもまたひとへなるうたゝねに

こゝろしてふけあきのはつかせ

題しらす

よみ人しらす

安法、師

136

少

おほあらきのもりのしたくさしけりあひて

ふかくもなつのなりにけるかな

たゝみね

〔白紙〕

拾遺和調集卷第三

秋

あきのはしめによみ侍ける

29才

28ウ

141 少

秋たちていくかもあらねとこのねぬる
あさけの風はたもとすゝしも

延喜御時屏風哥

みつね

142

ひこほしのつまゝつよひのあきかせに
われさへあやな人そこひしき

つらゆき

143

あき風によのふけゆけはあまのかは
かはせになみのたちあるこそまで

題しらす

柿本人まろ

144

あまのかはとをきわたりにあらねとも
きみかふなてはとしにこそまで

後撰

145

あまのかはこそそのわたりのうつろへは
あさせふむまによそふけにける

よみ人しらす

146

さよふけてあまのかはをそいてゝ見る
おもふさまなる雲やわたると

湯原王

147

ひこほしのおもひますらんことよりも
見るわれくるしよのふけゆけは

人まろ

148

としにありてひと夜いもにあふひこほしの

万

われにまさりておもふらむやそ

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

149

たなはたにぬきてかしつるからころも
いとゝなみたにそてやぬるらむ

右衛門督源清蔭家の屏風に

150

ひとゝせにひとよとおもへとたなはたの
あひむあきのかきりなきかな

左兵衛督藤原懷平家屏風に

恵慶法師

151

いたつらにすくる月日をたなはたの
あふよのかすとおもはましかは

七夕庚申にあたりて侍けるとし

もとすけ

152

いとゝしくいもねさるらんとおもふかな
けふのこよひにあへるたなはた

題しらす

よみ人しらす

153

あひ見てもあはてもなけくたなはたは
いつかこゝろののとけかるへき

わかいのことはひとつそあまのかは

そらにしりてもたかへさならむ

君こそすはたれに見せましわかやとの

31
才

30
ウ

31
ウ

32
才

32
ウ

156 かきねにさけるあさかほのはな
をみなへしおほかるのへにはなすゝき

少
いづれをさしてまねくなるらむ

157 てもたゆくうへしもしるくをみなへし
いろゆへ君かやとりぬるかな

少
小野宮太政大臣

158 くちなしのいろをそたのむをみなへし
はなにめてつと人にかたるな

少
をみなへしおほくさける家に
まかりて

よしのふ

159 をみなへしにほふあたりにむつるれは
あやなくつゆやこゝろをくらん

少
題しらす
よみ人しらす

160 しらつゆ。をくつまにするをみなへし
あなわつらはし人なてふれそ

嵯峨にせんさいほりにまかりて

藤原長能

161 ひくらしに見れともあかぬをみなへし
のへにやこよひたひねしなまし

少
八月はかりにかりのこゑまつうた
よみ侍けるに

惠慶法師

162 おきの葉もやうちそよくほとなるを

なとかりかねのをとなかるらん
齋院屏風に

34
才

163 かりにとてくへかりけりやあきの野の
はなみるほとにひもくれぬへし

題しらす

164 あきの野のはなのたてにをみなへし
かりにのみこん人におらるな

紀貫之

165 かりにとてわれはきつれとをみなへし
見るにこゝろそおもひつきぬる

陽成院御屏風にこたかゝりし
たる所に

34
ウ

166 かりにのみ人のみゆれはをみなへし
はなのたもとそつゆけかりける

亭子院のおまへに前裁うへさせ
給てこれよめとおほせことありければ

伊勢

167 うへたてゝ君かしめゆふはなゝれは
後撰
たまと見えてやつゆもをくらむ

題しらす
よみ人しらす

168 こてすすく秋はなけれとはつかりの
きくたひことにめつらしきかな

少
少将に侍けるときこまむかへにまか

35
才

169

少

りて

大貳高遠

あふさかのせきのいはかとふみならし
やまたちいつるぎりはらのこま

延喜御時月次御屏風に

170

少

あふさかの。し水^{せき}にかけ見えて

今やひくらんもちつきのこま

屏風に八月十五夜池ある家に人

あそひしたる所

源したかふ

171

少

みつのおもにてる月なみをかそふれは

こよひそ秋のもなかなりける

水に月のやとりて侍けるを

よしのふ

172

あきの月なみのそこにそいてにける

まつらむやまのかひやなからん

廉義公の家のかみゑに秋の月お

もしろき池ある家ある所

源 景明右衛門尉

173

あきの月にしにあるかと見えつるは

ふけゆくよはのかけにそありける

圓融院御時八月十五夜かける所に

もとすけ

174

あかすのみおもほえむをはいかゝせむ

36
ウ』

かくこそはみめあきのよの月

延喜御時八月十五夜藏人所のを
のことも月のえむし侍けるに

藤原經臣

175

少

こゝにたにひかりさやけきあきの月
雲のうへこそおもひやるるれ

おなし御時御屏風に

みつね

176

少

いつこにかこよひの月の見えさらむ
あかぬは人のこゝろなりけり

題しらす

かねもり

177

少

夜もすから見てをあかさむ秋のつき
こよひのそらにくもなからなむ

廉義公家にてくさむらのよるの

むしといふ題をよみ侍けるに

藤原為頼

178

おほつかないつこなるらんむしのねを

たつねはくさのつゆやみたれむ

前裁にすゝむしをはなち侍て

伊勢

179

少

いつこにもくさのまくらをすゝむしは
こゝをたひともおもはさらなむ

屏風に

つらゆき

180

少

あきくればはたをるむしのあるなへに

37
ウ』

37
オ』

からにしきにもみゆるのへかな

題しらす

よみ人しらす

ちきりけむほとやすきぬるあきの野に

人まつむしのこゑのたえせぬ

みつね

みつね

つゆけくてわか衣手はぬれぬとも

おりてをゆかむあきはきのはな

亭子院御屏風に

伊勢

うつろはんことたにおしきあきはきを

おれぬはかりもをけるつゆかな

三条のきさいの宮の裳き侍ける

屏風に九月九日の所

もとすけ

わかやとのきくのしらつゆけふことに

いく世つもりてふちとなるらむ

題しらす

みつね

なかつきのこゝぬかことにつむきくの

はなもかひなくおいにけるかな

右大將定國家屏風に

たみね

古今

ちとりなくさほのかはきりたちぬらし

やまのこのはもいろかはりゆく

延喜御時の御屏風に

つらゆき

かせさむみわかうらころもうつときそ

はきのしたはもいろまさりける

三百六十首の中に

曾祢好忠

神なひのみむろのやまをけふみれば

したくさかけていろつきにけり

題しらす

大中臣能宣

もみちせぬときはのやまはふく風の

をとにやあきをぎゝわたるらん

もみちせぬときはのやまにすむしかは

をのれなきてやあきをしるらむ

よみ人しらす

少

あきかせのうちふくことにたかさこの

おのへのしかのなかぬ日そなき

あきかせをそむくものからはなすゝき

ゆくかたをなとまねくなるらん

はつせへまうて侍けるみちに佐保

山のもとにまかりやとりてあしたにき

りのたちわたりて侍ければ

恵慶法師

もみち見にやとれるわれとしらねはや

さほのかはきりたちかくすらん

題しらす

よみ人しらす

38才』

38ウ』

39才』

187

188

189

190

191

192

193

39ウ』

40才』

40ウ』

もみちはのいろをしそへてなかるれば
あさくも見えずやまかはのみつ

大井河に人ゝまかりて哥よみ侍
けるに

よしのふ

42才』

もみちはをけふはなをみむくれぬとも
をくらのやまの名にはさはらし

題しらす よみ人しらす

あきゝりのたゝまくおしきやまちな
もみちのにしきをりつもりつゝ

大井河に紅葉のなかるゝを見て

健守法師

41才』

水のあやにもみちのにしきかさねつゝ
かはせになみのたゝぬ日そなき

西宮左大臣家の屏風にしかのやま
こえにつほさうそくしたる女とも

紅葉などある所に

したかふ

41ウ』

なをきけはむかしなからのやまなれと
しくるゝあきはいろまさりけり

東山にもみち見にまかりて又の
日つとめてまかりかへるとてよみ侍
ける

恵慶法師

43才』

きのふよりけふはまされるもみちはの
あすのいろをは見てやゝみなむ

天曆御時殿上のをのことも紅葉
見に大井にまかりけるに

源延光朝臣大納言

もみちはをてことにおりてかへりなむ
風のこゝろもうしろめたさに

源 兼光

えたなから見てをかへらむもみちはゝ
おらむほとにもちりもこそすれ

題しらす ふかやふ

かはきりのふもとをこめてたちぬれば
そらにそ秋の山は見えける

ちくふしまにまうて侍ける時もみ
ちのかけの水にうつりて侍ければ

法橋觀教

みつうみにあきの山へをうつしては
はたはりひろきにしきとそ見る

二条右大臣の粟田のやまさとの障子
のゑにたひ人もみちのしたにやとり

たる所 恵慶法師

いまよりはもみちのもとにやとりせし
おしむにたひの目かすへぬへし

題しらす よみ人しらす

42ウ』

205 少

とふ人もいまはあらしのやまかせに
人まつむしのこゑそかなしき

延喜御時中宮御屏風に

少

つらゆき

206

ちりぬへきやまのもみちをあきゝりの
やすくも見せすたちかくすらん

少

題しらす 僧正遍昭

207

あきやまのあらしのこゑをきくときは
このはならねとものそかなしき

少

つらゆき

208

あきの夜にあめときこえてふるものは
かせにしたかふもみちなりけり

少

こゝろもてちらむたにこそおしからめ
なとかもみちに風のふくらん

209

嵐の山のもとをまかりけるにも
みちのいたくちり侍けれは

少

右衛門督公任

210

あさまたきあらしのやまのさむけれは
もみちのにしきゝぬ人そなき

少

題しらす よしのふ

211

秋きりのみねにもおにもたつやまは
もみちのにしきたまらざりけり

少

大井に紅葉のなかるゝを見侍て

壬生忠岑

44ウ

いろ／＼のこのはなかるゝおほゐかは
しもはかつらのもみちとやみむ

題しらす よしたゝ

213

まねくとてたちもとまらぬあきゆへに
あはれかたよるはなすゝきかな

くれの秋重之かせうそこして
侍ける返事に

平 兼盛

214

くれてゆくあきのかたみにをくものは
わかもとゆひのしもにそありける

拾遺和調集巻第四

冬

延喜御時内侍のかみの賀の屏風に

紀 貫之

215

あしひきのやまかきくもりしくるれと
もみちはいとゝてりまさりけり

寛和二年清涼殿のみさうしに

あしろかける所

よみ人しらす

網代木にかけつゝあらふからにしき

日をへてよするもみちなりけり

しくれし侍ける日

つらゆき

46オ

45ウ

217

少

かきくらししくるゝそらをなかつゝ
おもひこそやれ神なひのもり

題しらす

よみ人しらす

218

神な月しくれしぬらしくすのはの
うらこかるねにしかもなくなり

奈良のみかと龍田河に紅葉御

覧しに行幸ありけるとき御と
もにつかうまつりて

柿本人麿

219

古今

たつたかはもみちはなかる神なひの
みむろのやまにしくれふるらし

ちりのこりたるもみちを見侍て

僧正遍昭

220

少

からにしきえたにひとむらのこれるは
あぎのかたみをたゝぬなりけり

延喜御時女四のみこの家の屏風

に

つらゆき

221

なかくるもみちは見れはからにしき
たきのいともてをれるなりけり

屏風に

平 兼盛

少

しくれゆへかつくたもとをよそ人は
もみちをはらふそてかとやみん

百首哥の中に

源 重之

223

あしのはにかくれてすみしつのくにの
こやもあらはに冬はきにけり

題しらす

つらゆき

224

少

おもひかねいもかりゆけはふゆのよの
かはかせさむみちとりなくなり

よみ人しらす

225

ひねもすに見れともあかねもみちはゝ
いかなる山のあらしなるらん

226

少

夜をさむみねさめてきけはをしとりの
うらやましくもみなる／＼かな

後撰

227

少

みつとりのしたやすからぬおもひには
あたりのみつもこほらさりけり

228

後撰

よをさむみねさめてきけはをしそなく
はらひもあへすしもやをくらん

229

少

しものうへにふるはつゆきのあさ氷
とけすもゝのをおもふころかな

230

少

しもをかぬそてたにさゆるふゆのよに
かものうはけをおもひこそやれ

題不知

右衛門督公任

231

いけみつやこほりとくらんあしかもの
よふかくこゑのさはくなるかな

47
ウ』46
ウ』47
オ』48
オ』48
ウ』

232

紀 友則

とひかよふをしのはかせのさむければ
いけのこほりそさえまさりける

49才

233

少

に定家卿自筆爲相模本
水のうへとおもひしものをふゆのよの
こほりはそてのものにそありける

もとすけ

234

少

ふしつけしよ。のわたりをけさ見れば
とけむこもなくこほりしにけり

屏風に

平 兼盛

241

少

冬の夜のいけのこほりのさやけきは
月のひかりのみかくなりけり

題しらす

よみ人しらす

50ウ

235

少

冬さむみこほらぬみつはなけれども
よしのゝたきはたゆるよもなし

恒徳公家の屏風に

49ウ

236

よしのふ

冬されはあらしのこゑもたかさこの
まつにつけてそきくへかりける

もとすけ

243

少

みやこにてめつらしと見るはつゆきは
よしのゝやまにふりやしぬらん

源 景明

51才

237

少

たかさこのまつにすむつるふゆくれば
おのへのしもやをきまさるらん

題しらす

紀とものり

238

少

ゆふされはさほのかはらのかはきりに
ともまとはせるちとりなくなり

人 磨

50才

239

古今

うらちかくふりくるゆきはしらなみの
すゑのまつやまこすかとそ見る

廉義公家障子

240

少

冬の夜のいけのこほりのさやけきは
月のひかりのみかくなりけり

題しらす

よみ人しらす

241

少

冬のいけのうへはこほりにとちられて
いかてか月のそこにいるらん

月を見てよめる

恵慶法師

242

少

あまのはらそらさへさえやわたるらん
こほりと見ゆる冬のよの月

はつ雪をよめる

243

少

みやこにてめつらしと見るはつゆきは
よしのゝやまにふりやしぬらん

女をかたらひ侍けるか年ころにな

り侍にけれとうとく侍ければゆき

のふり侍けるに

もとすけ

244

少

ふるほともはかなくみゆるあはゆきの
うらやましくもうちとくるかな

山あひにゆきのふりかゝりて侍ける
を 伊勢

51ウ

あしひきの山井にふれるしらゆきは
すれるころものこゝちこそすれ

齋院の屏風に

つらゆき

よるならば月とそまましわかやとの

後撰
にはしろたへにふれるしらゆき

題しらす よしのふ

わかやとのゆきにつけてそふるさとの

よしのゝやまはおもひやらるゝ

屏風のゑにこしのしらやまかきて

侍けるところに

藤原佐朝臣

52オ

われひとりこしのやまちにこしかとも

ゆきふりにけるあとを見るかな

題しらす たゝみ

としふれはこしのしらやまおいにけり

おほくのふゆの雪つもりつゝ

入道撰政の家の屏風に

かねもり

52ウ

題しらす

やまさとはゆきふりつみてみちもなし

けふこん人をあはれとは見む

人まろ

あしひきの山ちもしらすしらかしの

えたにもはにもゆきのふれゝは

右大将定國家の屏風に

つらゆき

しらすゆきのふりしくときはみよしのゝ

古今
やましたかせにはなそちりける

冷泉院御時御屏風に

かねもり

人しれすはるをこそまてはらふへき

ひとなきやとにふれるしらゆき

屏風に よしのふ

あたらしき春さへちかくなりゆけは

ふりのみまさるとしのゆきかな

右衛門督公任

むめかえにふりつむゆきはひとゝせに

ふたゝひさけるはなかとそ見る

屏風のゑに佛名の所

よしのふ

おきあかすしもとゝもにやけさはみな

53オ

53ウ

ふゆのよふかきつみもけぬらん

54才』

延喜御時の屏風に

つらゆき

258 少

としのうちにつもれるつみはかきくらし
ふるしらゆきとゝもにきえなむ

屏風のゑに佛名のあしたに梅の
木のもとに導師とあるしとかはらけ
とりてわかれおしみたる所

よしのふ

259 少

ゆきふかきやまちなになにゝかへるらん
はるまつはなのかけにとまらて

屏風のゑに佛名の所

かねもり

260

人はいさをかしやすらむふゆくれは
としのみつもるゆきとこそ見れ

斎院の屏風に十二月つこもりの
夜

少

かそふれはわか身につもるとしつきを
をくりむかふとなにいそくらむ

百首哥の中に

源 重之

262 少

ゆきつもるをのかとしをもしらすして
はるをはあすときくそうれしき

拾遺和謠集巻第五

55ウ』

賀

天曆御時齋宮くたり侍ける時の
長奉送使にてまかりかへらむとて

中納言朝忠

263 少

よろつよのはしめとけふをいのりをきて
いまゆくすゑは神そしるらん

はしめて平野祭に男使たてし
ときうたふへき哥よませしに

大中臣能宣

264 少

ちはやふるひらのゝまつのえたしけみ
千よもやちよもいろはかはらし

仁和の御時大嘗會の哥

よみ人しらす

265

かまふのゝたまのをやまにすむつるの
ちとせは君かみよのかすなり

贈皇后宮の御うふやの七夜に

兵部卿致平のみこのきしのかたを
つくりてたれともなくてうたをつ
けて侍ける

55才』

清原元輔

266 少

あさまたきゝりふのをかたつきしは
ちよのひつきのはしめなりけり

藤氏のうふやにまかりて

よしのふ

56才』

56ウ』

267 少

ふたはよりのもしきかなかすかやま
こたかきまつたねそとおもへは

57
才』

268 少

きみかへむやをよろつよをかそふれは
かつ／＼けふそなぬかなりける

58
ウ』

269

右大将藤原實資うふやの七夜に

平かねもり

ことしをひのまつはなぬかになりけり
のこりのほとをおもひこそやれ

ある人のうふやにまかりて

よしのふ

57
ウ』

270

ちとせともかすはさためすよのなかに
かきりなき身と人もいふへく

藤原誠信元服し侍ける夜よみける

源したかふ

271 少

おいぬれはおなしことこそせられけれ
きみはちよませ／＼

みよしのすけたゝかゝふりし侍ける時

よしのふ

272 少

ゆひそむるはつもとゆひのこむらさき
ころものいろにうつれとおもふ

天曆のみかと四十になりおはしま

しけるととき山しなてらに金泥

58
才』

寿命経四十巻をかき供養した

てまつりて御巻数つるにくはせ

てすはまにたてたりけりそのす

はまのしきものにあまたのうたあ

してにかけけるなかに

かねもり

273 少

やましなのやまのいはねにまつをうへて
ときはかきはいのりつるかな

仲算法師

274 少

こゑたかくみかさの山そよはふなる
あめのしたこそたのしかるらし

承平四年中宮の賀し侍りける

時の屏風に

齋宮内侍

275 少

いろかへぬまつとたけとのすゑのよを
いつれひさしときみのみそ見む

おなし賀にたけのつゑつくりて侍

けるに

大中臣頼基

276 少

ひとふしにちよをこめたる杖なれば
つくともつきし君かよはひは

清慎公五十の賀し侍ける時の屏風に

もとすけ

59
才』

277 少

君かよをなにゝたとへむさゝれ石の
いはほとならんほともあかねは

59ウ』

278

あをやきのみとりのいとをくりかへし
いくらはかりのはるをへぬらん

五条の内侍のかみの賀民部卿清貫
し侍けるとき屏風に
伊 勢

少

わかやとにさけるさくらのななさかり
ちとせ見るともあかしとおもふ

285

おほそらにむれたるたつのさしなから
おもふこゝろのありけなるかな
はるの野のわかなゝ。ねときみかため
としのかすをもつまんとそおもふ

61オ』

279

おなし人の七十賀し侍けるに
竹のつゑをつくりて

よしのふ

60オ』

280

きみかためけふきるたけの杖なれば
またもつきせぬ世ゝそこもれる

286

さくらはなこよひかさしにさしなから
かくてちとせのはるをこそへめ

九条右大臣

281 少

くらあやまみねまでつけるつえなれと
いまよろつよのさかのためなり

287

かつ見つゝちとせの春をすくすとも
いつかはゝなのいろにあくへき

61ウ』

一条摂政中將に侍ける時父の大臣
の五十賀し侍ける屏風に

亭子院哥合に

小野好古朝臣

みつね

282

ふくかせによそのもみちはちりくれと
きみかときはのかけそのときき

288

みちとせになるてふもゝのことしより
はなさくはるにあひにけるかな

権中納言敦忠母の賀し侍けるに

源公忠朝臣

康保三年内裏にて子日せさせ給
けるに殿上のをのことも和哥つかう

少

よろつよもなをこそあかねきみ。ため
おもふこゝろのかきりなければ

62オ』

藤原のふかた

289 少
めつらしきちよのはしめのねのひには
まつけふをこそひくへかりけれ
小野宮太政大臣家にて子日し侍ける
に下らうに侍ける時よみ侍ける

三条太政大臣 廉義公

290 少
ゆくすゑも子日のまつのためしには
きみかちとせをひかんとそおもふ
延喜御時御屏風に

つらゆき

291 少
まづをのみときはとおもふに世とゝもに
なかついつみもみとりなりけり
題しらす

よみ人しらす

292 少
みな月のなごしのはらへするひとは
ちとせのいのちのふといふなり
承平四年中宮の賀し侍ける屏風

参議 伊衡

293 少
みそきしておもふことをそのりつる
やをよろつよの秋のまに／＼
天曆御時前裁のえむせさせ給
けるとき

63才』

294 少
よろつよにかはらぬはなのいろなれは
いつれのあきかきみかみさらむ
小野宮太政大臣

廉義公家にて人／＼にうたよませ
侍けるにくさむらのなかのよるのむしと
いふ題を

平 兼盛

63ウ』

295 少
ちとせとそくさむらことにきこゆなる
こやまつむしのこゑにはあるらん
右大臣源のひかるのいゑに前裁あは
せし侍けるまけわさをうとねりたち
はなのすけみかし侍ける千鳥のかた
つくりて侍けるによませ侍ける

つらゆき

296 少
たかとしのかすとかは見むゆきかへり
ちとりなくなるはまのまさこを
天曆御時清慎公御ふえたてまつる
とてよませ侍ければ

よしのふ

64才』

おいそむるねよりそしるきふえたけの
すゑのよなくならむものとは
かゝみいさせ侍けるうらにつるのかた
をいつけさせ侍て

伊 勢

298 少
ちとせともなにかいのらんうらにすむ
たつのうへをそみるへかりける
題しらす

64ウ』

299 少

きみかよはあまのはころもまれにきて
なつともつきぬいはほならなむ

賀の屏風に

もとすけ

300

うきなきいはほのはてもきみそ見む
をとめのそてのなてつくすまで

〔白紙〕

拾遺和調集第六

別

春ものへまかりける人にあかつき
にいてたちける所にてとまり侍ける人
のよみ侍ける

よみ人しらす

301 少

はるかすみたつあかつきを見るからに
こゝろそゝらになりぬへらなる

題しらす

302 少

さくらはなつゆにぬれたるかほみれは
なきてわかれし人そこひしき

303 少

ちるはなはみち見えぬまでうつまなむ
わかるゝ人もたちやとまると

ものへまかりける人のもとに人く
まかりてかはらけとりて

曾祢のよしたゝ

304 少

かりかねのかへるをきけはわかれちは
雲井はるかにおもふばかりそ

天曆御時少貳命婦豊前にまかり
侍けるとき大はん所にて餞せさせ
たまふにかつけものたまふとて

御製

305 少

なつころもたちわかるへきこよひこそ
ひとへにおしきおもひそひぬれ

題しらす

よみ人しらす

306 少

わするなよわかれちにおふるくすのはの
あきかせふかはいまかへりこむ

307 少

わかれてふことはたれかははしめけむ
くるしきものとしらすやありけむ

308 少

ときしもあれあきしも人のわかるれは
いとゝたもとそつゆけかりける

天曆御時九月十五日齋宮くたり
侍けるに

御製

309 少

きみかよをなかつきとたにおもはすは
いかにわかれのかなしからまし

十月許にものへまかりける人に

たゝみ

310

つゆにたにあてしとおもひし人しもそ

66ウ

67ウ

66ウ

65ウ

しくれふるころたひにゆきける

ものへまかりける人にむまのはな
むけし侍てあふきつかはしける

よしのふ

わかれちをへたつるものためにこそ
あふきのかせをやらまほしけれ

題しらす

よみ人しらす

68
才』

312

少

わかれてはあはむあはしそきためなき
このゆふくれやかきりなるらん

わかれちはこひしき人のふみなれや
やらのみこそ見まくほしけれ

ものへまかりける人のをくりせき

山まてし侍とて

つらゆき

69
ウ』

317

少

もろともにゆかぬみかはのやつはしは
こひしとのみやおもひわたらん

かねもりするかのかみにてくたり侍
けるむまのはなむけし侍とて

源したかふ

318

わかれちはわたせるはしもなきものを
いかてかつねにこひわたるへき

しなのゝくにゝくたり侍ける人の
もとにつかはしける

つらゆき

68
ウ』

314

少

わかれゆくけふはまとひぬあふさかは
かへりこむ日のなにこそありけれ

い勢よりのほりけるにしのひて

ものいひ侍ける女のあつまへくたり
けるかあふさかにまかりあひて侍
けるにつかはしける

よしのふ

少

ゆくすゑのいのちもしらぬわかれちは
けふあふさかやかきりなるらん

大江為基あつまへまかりくたりける

69
才』

にあふきをつかはすとて

赤染衛門

316

少

おしむともなきものゆへにしかすかの
わたりときけはたゝならぬかな

源のよしたねか参河のすけにて侍
けるむすめのもとにはゝのよみて
つかはしける

317

少

もろともにゆかぬみかはのやつはしは
こひしとのみやおもひわたらん

かねもりするかのかみにてくたり侍
けるむまのはなむけし侍とて

源したかふ

318

わかれちはわたせるはしもなきものを
いかてかつねにこひわたるへき

しなのゝくにゝくたり侍ける人の
もとにつかはしける

つらゆき

319

月かけはあかす見るともさらしなの
やまのふもとになかあすなきみ

共政朝臣肥後守にてくたり侍ける
に妻のひぜんかくたり侍ければつく
しくし御そなたまふとて

天曆御製

320

少

わかるれはこゝろをのみそつくしくし

70
才』

さしてあふへきほとをしらねは

天曆御時御めのと肥後かいてはの
くににくたり侍けるにせんたまひ
けるにふちつほよりさうそくた
まひけるにそへられたりける

よみ人しらす

70ウ

321

少

ゆく人をとめかたみのからころも
たつよりそてのつゆけかるらん

おなし御めのとのせんに殿上のを
のことも女房なとわかれおし侍
けるに

御めのと少納言

71オ

322

少

おしむともかたしやわかれこゝろなる
なみたをたにもえやはとむる

女藏人参河

323

少

あつまちのくさはをわけむ人よりも
をくるゝそてそまつはつゆけき

題しらす
よみ人しらす

324

少

わかるれはまつなみたこそさきにたて
いかてをくるゝそてのぬるらん
わかるゝをゝしとおもふつるきはの
身をよりくたくこゝちのみして

源弘景ものへまかりけるにさうそく
たまふとて

71ウ

326

少

たひ人のつゆはらふへきからころも
またきもそてのぬれにけるかな

橘公頼帥になりてまかりくた

りける時としさたか継母内侍のす
けのむまのはなむけし侍けるに
さうそくにそへてつかはしける

つらゆき

327

少

あまたにはぬひかさねゝとからころも
おもふこゝろはちへにそありける

題しらす

328

とをくゆく人のためにはわかそての
なみたのたまもおしからなくに

よみ人しらす

329

おしむとてとまることこそかたからめ
わかころもてをほしてたにゆけ

ぬなかへまかりける時

つらゆき

330

古今

いによるものならなくにわかれちは
こゝろほそくもおもほゆるかな

みちのくにのかみこれとかまかり
くたりけるに彈正のみこのかう
やくつかはしけるに

戒秀法師

73オ

72オ

72ウ

331 少

かめやまにいくゝすりのみありければ
とゝむるかたもなきわかれかな

藤原まさたゝか豊前守に侍ける

時ためよりかおほつかなしとてく

たり侍けるにむまのはなむけし

侍とて

藤原清正

332 少

おもふ人あるかたへゆくわかれちを
おしむこゝろそかつはわりなき

肥後守にて清原元輔くたり侍

けるに源満中せんし侍けるに

かはらけとりて

もとすけ

333 少

いかばかりおもふらんとかおもふらん
おいてわかるゝとをきわかれを

返し

源満中朝臣

334 少

きみはよしゆくすゑとをしとまる身の
まつほといかゝあらんとすらん

題しらす

よみ人しらす

335

をくれゐてわかこひをれば白雲の
たなひくやまをけふやこゆらん

右衛門源兼澄女

336 少

いのちをそいかならんとはおもひこし

いきてわかるゝよにこそありけれ

つくしへまかりける人のもとに

いひつかはしける

橘 倚平

337 少

むかしみしいきのまつはらことゝはゝ
わすれぬ人もあれとこたへよ

陸奥守にてくたり侍けるとき

三条太政大臣の餞しはへりければ

よみ侍ける

藤原為頼

338 少

たけくまのまつをみつゝやなくさめん
きみかちとせのかけにならひて

みちのくにのしらかはのせきこえ

侍けるに

平 兼盛

たよりあらはいかてみやこへつけやらむ
けふしらかはのせきはこえぬと

實方朝臣みちのくにへくたり侍

けるにしたくらつかはすとして

右衛門督公任

340

あつまちのこのしたくらくなりゆかは
みやこの月をこひさらめやは

題しらす

よみ人しらす

341 少

たひゆけはそてこそぬるれもるやまの

へか定本

73
ウ

75
オ

74
オ

75
ウ

74
ウ

しづくにのみはおほせさらなむ
恒徳公家の障子に

かねもり

しほみてるほとにゆきかふたひ人や
はまなのはしとなつけそめけん

たみのゝしまのほとりにてあめ。あひて

つらゆき

76才

343
あめによりたみのゝしまをわけゆけと

古今

なにはかくれぬものにそありける

なにははらへし侍てまかりかへり

けるあかつきにもりの侍けるにほとゝ

きすのなきはへりけるをきゝて

伊勢

344
ほとゝきすねくらなからのこゑきけは

くさのまくらそつゆけかりける

ものへまかりけるみちにてかりのなく

をきゝて

76ウ

よしのふ

くさまくらわれのみならすかりかねも

たひのそらにそなきわたるなる

題しらす

よみ人しらす

きみをのみこひつゝたひのくさまくら

つゆしけからぬあかつきそなき

源公貞か大隅へまかりくたりける

にせきとの院にて月のあかゝりけ

77才

るにわかれおしみ侍て

平兼盛

347

はるかなるたひのそらにもをくれねは

うらやましきはあきのよの月

秋たひにまかりけるにいなみのに

やとりて

よしのふ

348

をみなへしわれにやとかせいなみのゝ

いなといふともこゝをすきめや

つくしへくたりけるみちにて

重之

349

ふなちにはくさのまくらもむすはねは

おきなかにこそゆめも見えけれ

帥伊周つくしへまかりけるにかは

しりはなれ侍けるによみ侍ける

ゆけのよしとき

350

おもひいてもなきふるさとのやまなれと

かくれゆくはたあはれなりけり

なかされ侍てのちいひをこせて侍

ける

贈太政大臣菅

78才

少

351

君かすむやとのこすゑをゆく／＼と

かくるゝまてにかへりみしはや

かさのかなをかゝもろこしにわたり

て侍けるときめのなかうたよみて

77ウ

待ける返し

かね(か)をか

78
ウ

なみのうへに見えしこしまのしまくれ
ゆくそもなしきみにわかれて

もろこしにて かきのもと人まろ

万

あまとふやかりのつかひにいつしかも

ならのみやこにことつてやらむ

拾遺和詞集卷第七

79
オ

物名

紅梅

よみ人しらす

354

うくひすのすつくるえたをおりつれば

こうはいかてかうまんとすらむ

さくら

355

はなのいろをあらはにめてはあためきぬ

いさくらやみになりてかさゝむ

いはやなき

藤原すけみ

356

たひのいはやなきとこにもねられけり

くさのまくらにつゆはをけとも

さるとりのはな

357

なくこゑはあまたすれともうくひすに

まさるとりのはなくこそありけれ

かにひのはな

伊 勢

少佳上

わたつ海のおきなかにひのはなれいてゝ

もゆと見ゆるはあまのいさりか

かいつはた よみ人しらす

80
オ

こきいろかいつはたうすくうつろはん
はなにこゝろもつけざらんかも

さくなんさ 如覚法師少将高光也

360

むらさきのいろにはさくなくむさしのゝ

くさのゆかりと人もこそ見れ

しもつけ

よみ人しらす

361

うへて見る君たにしらぬはなの名を

われしもつけむことのあやしき

りうたん

80
ウ

362

かはかみにいまよりうたむあしろには

まつもみちはやよらむとすらむ

きちかう

363

あた人のまかきちかうなはなうへそ

にほひもあへすおりつくしけり

あさかほ

364

わかやとのはなのはにのみぬるてふの

いかなるあさかほかよりはくる

けにこし

81
オ

365

わすれにし人のさらにもこひしきか

むけにこしとはおもふものから

らに

366

あきのゝにはなてふはなをおりつれば

わひしらにこそむしもなきけれ

かるかや 忠 岑

しらつゆのかゝるかやかてきえさらは
くさはそたまのくしけならまし

はきのはな

やまかはゝきのはなかれすあさきせを
せけはふちとそ秋はなるらん

松むし

たきつせのなかにたまつむしらなみは
なかるゝ水をゝにそぬきける

ひくらし

古今悉五遍昭

いまこんといひてわかれしあしたより
おもひくらしのねをのみそなく

つらゆき

少佳上

そま人はみやきひくらしあしひきの
やまのやまひこゑとよむなり

少同

まつねはあきのしらへにきこゆなり
たかくせめあけて風そひくらし

ひととききく すけみ

あたなりとひとときくるのへしもそ
はなのあたりをすきかてにする

すはうこけ

うくひすのすはうこけともぬしもなし
かせにまかせていつちいぬらん

31ウ

82オ

82ウ

やまと

少佳上

ふるみちにわれやまとはんにしへの
のなかのくさはしけりあひにけり

いなみの

すみよしのをかのまつかさゝしつれば
あめはふるともいなみのはきし

くるすの

しらなみのうちかくるすのかはかぬに
わかたもこそおとらさりけれ

このしまにあまのまうてたりけ
るを見て

みつもなくふねもかよはぬこのしまに
いかてかあまのなまめかるらん

よとかは

在原元方

うへていにし人も見なくにあきはきの
たれみよとかははなのさきけん

つらゆき

少佳上

あしひきのやまへにをればしらくもの
いかにせよとかはるゝときなき

をかはのはし

在原業平朝臣

つくしよりこゝまでくれとつともなし
たちのをかはのはしのみそある

くまのくらといふ山寺に賀縁法

師のやとりて侍けるにちうちし侍け

83オ

83ウ

る法師に哥よめといひ侍ければ

よみ人しらす

84
オ』

382

少佳上

身をすてゝやまにいりにしわれなれば
くまのくらはんこともおほえす

いぬかひのみゆ

383

少同

とりのこはまたひなゝからたちていぬ
かひのみゆるはすもりなりけり

あらふねのみやしろ

すけみ

384

少佳上

くきもはもみなみとりなるふかせりは
あらふねのみやしろくみゆらん

なとりのこほり

しけゆき

385

少同

あたなりなとりのこほりにおりるは
したよりとくことはしらぬか

なとりのみゆ

かねもり

おほつかなくものかよひち見てしかな

とりのみゆればあとはかもなし

さはこのみゆ

よみ人しらす

387

小同

あかすしてわかれし人のすむさとは
さはこのみゆるやまのあなたか

抄つゝのみみたけ

つゝみのたけ

紀 輔時

388

少同

かゝりひのところさためす見えつるは

むろの木

高向草春

神なひのみむろのきしやくつるらん
たつたのかはのみつのにこれる

きさのき

すけみ

いかりゐのいしをくゝみてかみこしは
きさのきにこそおとらさりけれ

はなかむし

仙慶法師

さみたれにならぬかきりはほとゝきす
なにかはなかんしのふはかりに

もゝ

すけみ

こゝろさしふかきときにはそのものゝ
かつきてぬるものにそありける

はしはみ

よみ人しらす

おもかけにしはしはみゆるきみなれと
こひしきことそときそともなき

ねりかき

すけみ

いにしへはをこれりしかとわひぬれば
とねりかきぬもいまはきつへし

おはりこめ

いけをはりこめたるみつのおほかれは
いひのくちよりあるなるへし

まつたけ

あしひきのやましたみつにぬれにけり
その火まつたけころもあふらん

86
ウ』

85
ウ』

86
ウ』

397

いとへともつらきかたみを見るときは
まつたけからぬねこそなかるれ

くゝたち

398

やまたかみはなのいろをも見るへきに
にくゝたちぬるはるかすみかな

こにやく

399

野を見ればはるめきにけりあをつゝら
こにやくまゝしわかなむつむへく

そやしめめ

高岳相如

400

いさりせしあまのをしへしいつこそや
しまめくるとてありといひしは

きしのをとす けみ

401

かはきしのをとりおるへきところあらは
うきにしにせぬ身はなけてまし

やまからめ

402

もみちはころものいろはしみにけり
あぎのやまからめくりこしまに

かやくき

403

なにとかやくきのすかたはおもほえて
あやしきはなのこそわするれ

つくみ

大伴黒主

404

わかこゝろあやしくあたにはるくれは
はなにつく身となてなりけん

さくはなにおもひつくみのあちきなさ

少同

87
ウ

87
オ

古今序

身にいたつきのいるもしらすて

つはくらめ すけみ

なにはつはくらめにのみそふねはつく

あしたのかせのさためなけれは

はらか もとすけ

みよしのもわかなつむらんわきもこか

ひはらかすみて日かすへぬれは

さけからみ すけみ

あしきぬはさけからみてそ人はぎる

ひろやたらぬとおもふなるへし

火ほしあゆ

雲まよひほしのあゆくと見えつるは

ほたるのそらにとふにそありける

をしあゆ

はしたかのをきゑにせむとかまへたる

をしあゆかすなねすみとるへく

つゝみやき

少佳上

わきもこかみをすてしよりさるさはの

いけのつゝみやきみはこひしき

うるかいり しけゆき

少同

このいゑはうるかいりてもみてしかな

あるしなからもかはんとそおもふ

したゝみ

よみ人しらす

あつまにてやしなはれたる人のこは

89
オ

88
ウ

88
オ

したゝみてこそものはいひけれ

さはやけ

414

少佳上

はるかせのけさはやければうくひすの
はなのころもゝほころひにけり

まかり

415

かすみわけいまかりかへるものならば
あきくるまではこひやわたらむ

とちどころたちはな

すけみ

416

少佳上

おもふとちところもかへすゝみへなむ
たちはなれなはこひしかるへし

くちはいろのおしき

417

あしひきのやまのこのはおちくちは
いろのおしきそあはれなりける

あしかなへ

418

少佳上

つのくにのなにはわたりにつくる田は
あしかなへかえこそ見わかぬ

むなくるま

419

たかゝひのまたもなくなにつなぎいぬの
はなれていかむなくなるまつほと

いかるかにけ みつね

420

少佳上

ことそもきゝたにわかすわりなくも
人のいかるかにけやしなまし

ねすみのことのほらにこをうみたるを

89ウ』

すけみ

としをへてきみをのみこそねすみつれ

ことはらにやはこをはうむへき

月のきぬをきて侍けるに

ひさかたのつきのきぬをはきたれとも

ひとりはそのぬわか身なりけり

きさのきのはこ

世とゝもにしほやくあまのたえせねは

なきさのきのはこかれてそちる

なかむしろ

うくひすのなかむしろにはわれそなく

はなのほひやしはしとまると

へうのかは

そこへうのかはなみわけていりぬるか

まつほとすきて見えすもあるかな

かのかはのむかはき

かのかはのむかはきすきてふかゝらは

わたらてたゝにかへるはかりそ

かのえさる

かのえさるふねまでしはしことゝはん

おきのしらなみまたゝたぬまに

かのとゝいふことを

惠慶法師

少佳上

さをしかのともまとはせるこゑすなり

90オ』

91ウ』

91オ』

つまやこひしきあきのやまへに

ねうしとらうたつみ

92才

よみ人しらす

ひとよねてうしとらこそはおもひけめ

うきなたつ身そわひしかりける

むまひつしさととりいぬる

むまれよりひつしつくればやまにさる

ひとりいぬるにひとあていませ

四十九日 すけみ

少佳上

あきかせのよものやまよりのかしゝ

ふくにちりぬるもみちなしな

拾遺和詞集卷第八

雑上

月を見侍て

中務卿具平親王

少佳下

よにふるにものおもふとしもなけれとも

月にいくたひなめしつらん

清慎公家屏風に

つらゆき

少同

おもふことありとはなしにひさかたの

月よとなれはねられさりけり

めにをくれて侍けるころ月を

見侍て

大江為基

93ウ

434 少同 なかむるにものおもふことのなくさむは

月はうきよのほかよりやゆく

法師にならむとおもひたち侍ける

ころ月を見侍て

藤原たかみつ

94才

435 少同 かくはかりへかたくみゆるよのなかに

うらやましくもすめる月かな

冷泉院の東宮におはしましける

時月をまつ心の哥をのこともの

よみ侍けるに

藤原仲文

少同

436 ありあけの月のひかりをまつほとに

わかよのいたくふけにけるかな

参議玄上かめの月のあかき夜

かとのまへをわたるとてせうそこい

ひいて侍ければ

伊勢

94ウ

437 少同 雲ゐにてあひかたらはぬ月たにも

わかやとすきてゆくときはなし

花山にまかりて侍けるにこまひ

きの御むまをつかはしたりければ

素性法師

438 後撰 もちつきのこまよりをそくいてつれば

95才

たとる／＼そやまはこえつる
屏風のゑに

つらゆき

439

少
隼下
つねよりもてりまさるかなやまのはの
もみちをわけていつる月かけ

みつね

440

少
同
ひさかたのあまつそらなる月なれと
いつれのみつにかけやとらん

廉義公後院にすみ侍ける時哥

よみ侍ける人／＼めしあつめて水上

秋月といふ題をよませ侍ける

右大将済時

441

みなそこにやとる月たにうかへるを
しつむやなにのみくつなるらむ

式部大輔文時

442

少
隼下
水のおもに月のしつむを見さりせは
われひとりとおもひはてまし

除目のあしたに命婦左近かもとに

つかはしける

もとすけ

443

少
同
年ごとにたえぬなみたやつもりつゝ
いとふかくは身をしつむらん

圓融院御時御屏風哥たてまつ

りけるついでにそへてたてまつりける

444

したかふ
ほともなくいつみはかりにしつむ身は
いかなるつみのふかきなるらん

権中納言敦忠か西さかもとの山庄の

たきのいはにかきつけ侍ける

少
隼下

445

をとはかはせきいておとすたきつせに
ひとのこゝろの見えもするかな

少
同

446

きみかくるやとにたえせぬたきのいとは
へてみまほしきものにそありける

題しらす

つらゆき

447

少
同
なかくるたきのしらいたえすして
いくらのたまのをとかならん

延喜十三年齋院御屏風四帖か

うたおほせによりて

なかくるたきのいとこそよはからし

ぬけとみたれておつるしらたま

大学寺に人／＼あまたまかりたり

けるにふるきたきをよみ侍ける

右衛門督公任

たきのいとはたえてひさしくなりぬれと

なこそなかれてなをきこえけれ

96
ウ

97
ウ

97
ウ

450 少佳下 題しらす み つ ね
おほそらをなかくめそくらすふく風の
をとほすれともめにし見えねは

野宮に齋宮の庚申し侍けるに松
風入夜琴といふ題をよみ侍ける

齋宮女御

451 少同
ことのねにみねの松かせかよふらし
いつれのおよりしらへそめけん

452 少同
まつかせのをとにみたるゝことのねを
ひけはねのひのこゝちこそすれ

天曆御時名ある所を御屏風に

かゝせ給て人ゝに哥たてまつらせた
まひけるにたかさこを

忠 見

453 少同
おのへなるまつのこすゑはうちなひき
なみのこゑにそ風もふきける

延喜御時御屏風に

つらゆき

454 少同
あめふるとふくまつかせはきこゆれと
いけのみきはゝまさらさりけり

おなし御時大井に行幸ありて

人ゝに哥よませ給けるに

少佳上

おほ井かは河邊のまつにことゝはん

かゝるみゆきやありしむかしも

住吉にくにのつかさの臨時祭し侍
ける舞人にてかはらけとりてよみ
侍ける

をとにのみきゝわたりつるすみよしの
まつのとせをけふ見つるかな

五条の内侍のかみの賀の屏風に
松のうみにひたりたる所を

伊 勢

457 少佳下
うみにのみひちたるまつのかみとり
いくしほとかはしるへかるらん

ものへまかりける人にぬきつかはし

ける衣はこにうきしまのかたをし侍て

よしのふ

458

わたつみのなみにもぬれぬうきしまの
まつにこゝろをよせてたのまん

題しらす よみ人しらす

かこのしまゝつはらこしになくたつの
あなゝかゝしきく人なしに

あひかたらひ侍ける人のみちのくに
へまかりければ

よしのふ

460

いかてわれわか身にかへてたけくまの
まつともならむゆく人のため

河原院の古松をよみ侍ける

99 才

98 才

98 才

99 才

100 才

461

源 道濟

ゆくすゑのしるしはかりにのこるへき
まつさへいたくおいにけるかな

題しらす よみ人しらす

よの中をすみよしとしもおもはぬに
なにをまつとてわか身へぬらん

つかさたまはらてなけき侍けるころ
人のさうしかゝせ侍けるおくにかきつ
け侍ける

つらゆき

463

少佳下

いたつらによにふるものとたかさこの
まつもわれをやとともに見るらむ

あかしの浦のほとりに舟にのりて
まかりけるに

源 為憲

464

少佳下

よとゝもにあかしのうらのまつはらは
なみをのみこそよるとしるらめ

題しらす よみ人しらす

少同

もかりふねいまそなきさにきよすなる
みきはのたつのごゑさはくなり

うちしのひいさすみのえのわすれくさ
わすれて人のまたやつまぬと

山寺にまかりける暁にひくらしの
なき侍ければ

100ウ

101オ

101ウ

467

少佳下

左大将濟時

あさほらけひくらしのごゑきこゆなり
こやあけくれと人のいふらむ

天曆御時御屏風のゑになからの
はし／＼らのわつかにのこれるかたありけるを

藤原きよたゝ

102オ

468

少同

あしまより見ゆるなからのはし／＼ら
むかしのあとのしるへなりけり

大江為基かもとにうりにまうてき
たりけるかゝみのつゝみたりけるかみ
にかきつけて侍ける

よみ人しらす

469

少同

けふまてと見るになみたのますかゝみ
なれにしかけを人にかたるな

たちはなのたゝもとか人のむすめにし
のひてものいひ侍けるころとをき所に
まかり侍とてこの女のもとにいひつかはしける

102ウ

470

少同

わするなよとは雲井になりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて

題しらす つらゆき

少同

としつきはむかしにもあらずなりゆけと
こひしきことはかはらざりけり

清慎公月林寺にまかりけるにをく
れてまうてきてよみ侍ける

103オ

藤原後生

472

むかしわかおりしかつらのかひもなし
月のはやしのめしにいらねは

菅原の大臣かうふりし侍ける夜は、

のよみ侍ける

少佳上

473

ひさかたのつぎのかつらもおるはかり
いゑのかせをもふかせてしかな

題しらす 人まろ

古今

474

つぎくさころもはすらむあさつゆに
ぬれてのゝちはうつろひぬとも

万

475

ちゝわくに人はいふともをりてきむ
わかたものしろきあさぎぬ

476

ひさかたのあめにそきぬをあやしくも
わかころもてのひるときもなき

万

477

しらなみはたてところもにかさならす
あかしもすまもをのかうら／＼

もろこしへつかはしける時よめる

ゆふされは衣手さむしわきもこか

万

478

ときあらひ衣ゆきてはやくむ
なかされ侍けるみちにてよみ侍ける

贈太政大臣菅

479

あまつほしみちもやとりもありながら
そらにうきてもおもほゆるかな

うき木といふ心を

480

なかれ木もみとせありてはあひみてむ
よのうきことそかへらざりける

つかさとられて侍ける時いもうとの

女御のもとにつかはしける

平 定文

481

うき世にはかとさせりとも見えなくに
なとかわか身のいてかてにする

中宮長恨哥の御屏風に

伊 勢

482

木にもおひすはねもならへてなにしかも
なみちへたてゝきみをきくらん

大津の宮のあれて侍けるを見て

人まろ

483

さゝなみやあふみのみやはなのみして
かすみたなひきみやきもりなし

はつせへまうて侍けるみちにさほ山

のわたりにやとりて侍けるに千鳥の

なくをきゝて

よしのふ

484

あかつきのねさめのちとりたかためか
さほのかはらにをちかへりなく

ものへまかりける人のもとにぬさを

むすひふくろにいてつかはすとて

あさからぬちきりむすへるこゝろは、

たむけの神そしるへかりける

104ウ

103ウ

104オ

105オ

105ウ

はつせのみちにてみわの山を見侍て

もとすけ

みわの山しるしのすきはありながら
をしへし人はなくていく世そ

對馬守をのゝあきみちかめおきか

くたり侍ける時にともまさの朝臣の

妻肥前かよみてつかはしける

おきつしま雲井のきしをゆきかへり

ふみかよはさむまほろしもかな

詠天

人まろ

万

そのうみにくものなみたち月のふね
ほしのはやしにこきかくるみゆ

もをよめる

万

かはのせのうつまくみればたまもかる
ちりみたれたるかはのふねかも

やまをよめる

万

なるかみのをとにのみきくまきもくの
ひはらのやまをけふみつるかな

詠葉

万

いにしへにありけん人もわかことや
みわのひはらにかさしおりけん

題しらす

つらゆき

人しれすこゆとおもひしあしひきの
やました水にかけは見えつゝ

107才』

いせのみゆきにまかりとまりて

人まろ

万

おふのうみにふなのりすらんわきもこか
あかものすそにしほみつらんか

天曆十一年九月十五日齋宮くたり侍

けるに内よりすゝりてうしてたまは

すとして

御製

少佳上

おもふことなるといふなるすゝかやま

こえてうれしきさかひとそきく

圓融院御時齋宮くたり侍けるに

母の前齋宮もろともにこえ侍とて

齋宮女御

少同上

よにふれはまたもこえけりすゝかやま

むかしのいまになるにやあるらむ

あすかの女王をおさむる時よめる

人まろ

万

あすかゝはしからみわたしせかませは
なかるゝ水ものとけからまし

小一条左大臣師尹まかりかくれてのちかの

家に侍けるつるのなき侍けるを

きゝ侍て

小野宮太政大臣

少佳下

をくれあてなくなるよりはあしたつの

108才』

107ウ』

なとかよはひをゆつらさりけん

左大臣の土御門の左大臣のむこに
なりてのちしたうつのかたをとり
をこせて侍ければ

愛 宮

108
ウ』

としをへてたちならしつるあしたつ
いかなるかたにあとゝとむらん

大貳國章こくのおひをかりて侍
けるをつくしよりのほりて返し
つかはしたりければ

もとすけ

109
オ』

ゆくすゑのしのふくさにもありやとて

つゆのかたみもをかととおもふ

題しらす 中 務

うへて見るくさはそよをはしらせける
をきてはきゆるけさのあさつゆ

ゐなかにてわつらひ侍けるを京より
人のとふらひにをこせて侍ければ

ゆけのよしとき

つゆのいのちおしとにはあらす君をまた
見てやとおもふそかなしかりける

神明寺の邊に無常所まうけて侍
けるいとおもしろく侍ければ

もとすけ

少し下
おしからぬいのちやさらにのひぬらん

109
ウ』

をはりのけふりしむるのへにて

二条右大臣左近番長佐伯清忠を
めしてうたよませ侍けるをのそむこと
侍けるかなひ侍らさりけるころにて
よみ侍ける

少同

かきりなきなみたのつゆにむすはれて
人のしもとはなるにやあるらむ
かゝいし侍へかりけるとしえし侍らて
ゆきのふりけるを見て

もとすけ

504

うき世にはゆきかくれなてかきくもり
ふるはおもひのほかにもあるかな

つかさ申にたまはらさりけるころ
人のとふらひにをこせたりける返事に

源 景明

110
ウ』

505

少佳下

わひ人はうき世のなかにいけらしと
おもふことさへかなはさりけり
題しらす よみ人しらす

よの中にあらぬところもえてしかな
としふりにたるかたちかくさむ

世の中をかくいひくのはてくは
いかにやいかならむとすらん
おとこ侍ける女をせちにけさうし
侍ておとこのいひつかはしける

507

506

111
オ』

いにしへのとらのたくひに身をなけは
さかとはかりはとはむとそおもふ
拾遺和詞集卷第九

雑下

ある所に春秋いつれかまざるとゝ
はせ給けるによみてたてまつりける

紀 貫之

少佳下

はるあきにおもひみたれてわきかねつ
ときにつけつゝうつるころは

元良のみこ承香殿のとしに春秋

いつれかまざるとゝひ侍ければ秋も

おかしう侍りといひければおもしろきさ

くらをこれはいかゝといひて侍ければ

おほかたのあきにころはよせしかと

はなみるときはいつれともなし

題しらす よみ人しらす

春はたゝはなのひとへにさくはかり

ものゝあはれはあきそまされる

圓融院のうへうくひすとほとゝぎすと

いつれかまざるとさため申せとおほ

せられければ

大納言朝光

おりからにいつれともなきとりのねも

いかゝさためるときならぬ身は

みつねたゝみねにとひ侍ける

111ウ』

少佳上

参議伊衡

しらつゆはうへよりをくをいかなれば
はぎのしたはのまつもみつらむ

少同

みつね

さをしかのしからみふするあきはきは

したはやうへになりかへるらん

少佳上

たゝみね

あきはきはまつさすえよりうつろふを

つゆのわくとはおもはさらなむ

又とふ

これひら

ちとせふるまつのみとりのいろつくは

たかしたかみにかけてかへすそ

こたふ

みつね

まつといへとちとせの秋にあひくれば

しのひにおつるしたはなりけり

又とふ

これひら

しろたへのしろき月をもくれなゐの

いろをもなとかあかしといふらん

こたふ

みつね

むかしよりいひしきにけることなれば

われらはいかゝいまはさためん

又とふ

これひら

かけ見ればひかりなきをもちろもぬふ
いとをもなとかよるといふらん

114オ』

113ウ』

113オ』

521 きたふ み つ ね

むはたまのよるはこひしき人にあひて
いとをもよればあふとやは見ぬ

又とふ 伊 衡

よるひるのかすはみそちにあまらぬを
なとなか月といひはしめけん

こたふ み つ ね

あきふかみこひする人のあかしかね
よをなかつきといふにやあるらん

哥合のあはせすなりにけるに
よみ人しらす

524 みつのあはやたねとなるらんうきくさの
まく人なみのうへにおふれは

この哥つらゆきか集にあり

草合し侍ける所に

恵慶法師

少佳下

525 たねなくてはなきもの草はおひにけり
まくてふことはあらしとおもふ

なそくものかたりしける所に
そねのよしたゝ

少同

526 わかことはえもいはしろのむすひまつ
ちとせをふともたれかとくへき

題しらす よみ人しらす

527 あしひぎのやまのこてらにすむ人は
わかいふこともかなはさりけり

115 ウ 健守法師佛名のゝふしにてまかり

いてゝ侍けるとしいひつかはしける

源経房朝臣

528 やまならぬすみかあまたにきく人の

野ふしにとくもなりにけるかな

返し

529 やまふしものふしもかくてこゝろみつ

いまはとねりのねやそゆかしき

屏風に法師の舟にのりてこきい

てたる所 右大将道綱母

少佳下

530 わたつ海はあまのふねこそありときけ
のりたかへてもこきいてたるかな

内より人の家に侍ける紅梅をほら

せ給けるにうくひすのすくひて侍ければ

家あるしの女まつかくそうせさせ侍ける

勅なれはいともかしこしうくひすの

やとはととはいいかゝこたへむ

531 かくそうせさせければほらすなりにけり

ある所にせ経し侍けるほうしのすそうは

らのあて侍けるにすたれの内より

はなをおりてといひ侍ければ

寿玄法師

少佳上

532 いなおらしつゆにたもとのぬれたらは
ものおもひけりと人もこそ見れ

115 ウ

116 オ

116 ウ

月を見侍て

よしのふ

あつさゆみはるかにみゆるやまのはを
いかてか月のさしているらむ

117
ウ』

かもにまうてゝ侍けるおとこの見侍て
いまはなかくれそいとよく見てきと
いひをこせて侍ければ

伊 勢

そらめをそ君は見たらしかはのみつ
あさしやふかしそれはわれかは

能宣に車のかもをこひにつかはし
て侍けるに侍らすといひて侍ければ

藤原仲文

117
ウ』

少佳下

かをさしてむまといふ人ありければ
かもをもをしとおもふなるへし

返し よしのふ

少同

なしといへはおしむかもとやおもふらん
しかやむまとそいふへかりける

廉義公家のかみゑにあおむまある
所にあしのはなけのむまあるところ

惠慶法師

少同

なには江のあしのはなけのましれるは
つのくにかひのこまにやあるらむ

つのかみに侍ける人のもとにてよみ侍ける

118
オ』

たゝみ

なにはかたしけりあへるはきみかよに
あしかるわさをせねはなるへし

つのくにゝまかれりけるにしり
たる人にあひ侍て

みやこにはすみわひはてゝつのくにの
すみよしときくさとにこそゆけ

なにはにはらへしにある女まかりたり
けるにもとしたしく侍けるおとこの

あしをかりてあやしきさまになりて
みちにあひて侍けるにさりけなくて

としころはえあはさりつることなと
いひつかはしたりければおとこのよみ侍ける

少佳下

きみなくてあしかりけりとおもふにも
いとゝなにはのうらすすみうき

返し

あしからしよからむとてそわかれけん
なにかなにはのうらはすみうき

伊勢の宮す所うみたてまつりたり
けるみこのなくなりけるかかきを

きたりけるゑをふちつほよりれいけ
いてんの女御の方につかはしたりけ

れはこのゑかへすとして

なき人のかたみとおもふにあやしきは
麗景殿みやのきみ

119
ウ』

118
ウ』

多みてもそのぬるゝなりけり

地獄のかたかきたるを見て

藤原道雅女

みつせかはわたるみさをもなかりけり
なにゝころもをぬきてかくらむ

こそそのあきむすめにをくれて侍ける
にむまこのゝちの春兵衛佐になりて
侍けるよろこひを人ゝいひつかはし
はへりければ

皇太后宮権大夫國章

544

少佳下

かくしこそはるのはしめはうれしけれ
つらきはあきのをはりなりけり

源重之か母の近江のこふに侍けるに
むまこのあつまよりよるのほりてい
そくこと侍とてえこのたひあはてのほ
りぬることゝいひて侍ければをはの女の
よみ侍ける

545

少同

おやのおやとおもはましかはとひてまし
わかこのこにはあらぬなるへし

題しらす 人まろ

546

万

やまたかみゆふひかくれぬあさはら
のちみんためにしめゆはましを

貫之

547

少佳下

なのみしてやまはみかさもなかりけり

あさひゆふひのさすをいふかも

よみ人しらす

548

なのみしてなれるも見えずむつめかは
井せきの水のもれはなりけり

549

なにはいへとくろくも見えするしかは
さすかにわたるみつはぬるめり

あめふるひおほはらかはをまか
りわたりけるにひるのつきたりければ

恵慶法師

550

少佳下

よのなかにあやしきものはあめふれと
おほはらかはのひるにそありける

かうふりやなきを見て

仲文

551

少同

かはやなきいとみとりにあるものを
いつれかあけのころもなるらん

天曆御時一条摂政藏人頭にて

侍けるにおひをかけて御こあそはし
けるまけたてまつりて御かすおほく
なり侍ければおひをかへしたまふとて

御製

552

少佳下

しらなみのうちやかへすとまつほとに
はまのまさこのかすそつもれる

内侍馬か家に右大将實資かわ

らはに侍ける時こうちにまかりたり

121
才』

120
才』

120
ウ』

122
才』

ければものかゝぬさうしをかけものにして侍けるを見侍て

少野宮太政大臣

少同

いつしかとあけて見たればはまちとりあとあることにあとのなきかな

返し

少同

とゝめてもなにゝかはせんはまちとりふりぬるあとはなみにきえつゝ

題しらす よみ人しらす

みなそのわくはかりにやくゝるらん

よる人もなきたきのしらいと

清原元輔肥後守に侍ける時かの

くにのつゝみのたきといふ所を見に

まかりたりけるにことやうなる法師の

よみ侍ける

をとにきくつゝみのたきをうち見れば

たゝやまかはのなるにそありける

三位國章ちひさきうりを扇にを

きて藤原かねのりにもたせて大

納言朝光か兵衛佐に侍けるときつか

はしたりければ

をとにきくこまのわたりのうりつくり

となりかくなりなるこゝろかな

返し

558

さためなくなるなるうりのつら見ても
たちやよりこんこまのすきもの

みちのくになとりのこほりくろつか
といふ所に重之かいもうとあまたあ
りときゝていひつかはしける

かねもり

559

少佳下

みちのくのあたちのはらのくろつかに
おにこもれりときくはまことか

廉義公家のかみゑにたひゝとの

ぬす人にあひたるかたかける所

藤原為頼

560

少佳下

ぬす人のたつたのやまにいりにけり

おなしかさしのなにやけかれむ

少同

なき名のみたつたのやまのふもとは

よにもあらしのかせもふかなむ

たかをにまかりかよふ法師になたち

侍けるを少将しけもとかきゝつけて

まことかといひつかはしたりければ

八条のおほいきみ

少同

なきなのみたかをのやまといひたるを

きみはあたこのみねにやあるらん

みたけにとしおいてまうて侍て

もとすけ

少同

いにしへものほりやしけんよしのやま

122
ウ』

123
オ』

123
ウ』

124
オ』

124
ウ』

やまよりたかきよはひなる人

大隅守さくらしまの忠信かくに侍
ける時こほりのつかさにかしらしろ
きおきな侍けるをめしかむかへむ
とし侍けるときおきなのよみ侍ける

125
オ

少同

おいはてゝゆきのやまをはいたゝけと
しもと見るにそ身はひえにける

このうたによりてゆるされ侍にけり

施頭哥

565

ますかゝみそこなるかけにむかひあて
見るときにこそしらぬおきなにあふ心ちすれ

柿本人麿

125
ウ

566

万

ますかゝみみしかとおもふいもにあはむかも
たまのをのたえたるこひのしけきこのころ
かのをかくさかるをのこしかなかりそ。

万

「ありつゝも」きみかきまさむ見まくさにせむ
女のもとにまかりたりけるにとくいり
にければあしたに

源かけあきら

少佳上

あつさゆみおもはすにしていりにしを

「さもねたく」ひきとゝめてそふすへかりける
抄此句

なかうた

よしのゝ宮にたてまつる短哥

人まろ

126
オ

569

万葉やみしる

ちはやふる わかおほぎみの きこしめす 本四句ヲ一行ニ書也
あめのしたなる くさのほも クニハシモ うるひにたりと

やまかはの すめるかうちと みこゝろを
よしのゝ國の はなさかり あきつのゝへに
宮はしら ふとしきまして もゝしきの
おほみや人は ふねならへ あさかはわたり

126
ウ

ふなくらへ ゆふかはわたり このかはの
たゆることなく このやまの (アサ) いやたかゝらし
たまみつの たきつの宮こ (ミナト) みなとあかぬかも

反哥

570

見れとあかぬよしのゝかはのなかれても
たゆるときなくゆきかへりみん

身のしつみけることをなけきて勘解

由判官にて

127
オ

571

源したかふ

あらたまの としのはたち たらざりし
時はの山の やまさむみ 風もさはらぬ

ふちころも ふたゝひたちし あさきりに

心もそらに まとひそめ みなしこ草に

なりしより ものおもふとの はをしけみ

けぬへきつゆの よるはをきて なつはみきはに

もえわたる ほたるを袖に ひろひつゝ

冬ははなかと 見えまかひ このもかのものに

ふりつもる 雪をたもとに あつめつゝ

127
ウ

ふみゝていてし みちはなを みのうぎにのみ
 ありければ こゝもかしこも あしねはふ
 したにのみこそ しつみけれ たれこゝのへへの
 さはみつに なくたつのねを ひさかたの
 くものうへまで かくれなみ たかくぎこゆる
 かひありて いひなかしけむ 人はなを
 かひもなきさに みつしほの よにはからくて
 すみのえの 松はいたつら おいぬれと
 みとりの衣 ぬきすてむ はるはいつとも
 しらなみの なみちにいたく ゆきかよひ
 ゆもとりあへす なりにける ふねのわれをし
 きみしらは あはれいまに しつめしと
 あまのつりなは うちそへて ひくとしきかは
 ものはおもはし

返し

よしのふ

よのなかを おもへはくるし わするれは
 えもわすられす たれもみな おなしみ山の
 まつかえと かるゝことなく すへらぎの
 千世も八千世も つかへむと たかきたのみに
 かくれぬの したよりねさす あやめくさ
 あやなき身にも 人なみに かゝるこゝろを
 おもひつゝ 世にふる雪を きみはしも
 冬はとりつみ なつはまた 草のほたるを
 あつめつゝ ひかりさやけき ひさかたの
 月のかつらを おるまでに 時雨にそほち

128オ

128ウ

つゆにぬれ へにけん袖の ふかみとり
 色あせかたに いまはなり かつしたはより
 くれなゐに うつろひはてむ あきにあはゝ
 まつひらけなむ はなよりも こたかきかけと
 あふかれむ ものとこそみし しほかまの
 うらさひしけに なそもかく 世をしもおもひ
 なすのゆの たぎるゆへをも かまへつゝ
 わか身を人の 身になして おもひくらへよ
 もゝしきに あかしくらしと とこなつの
 雲井はるけき みな人に をくつこれてなけく
 われもあるらし

あるおとこのものいひ侍ける女のしの
 ひてにけ侍てとしころありてせうそ
 こして侍けるにおとこのよみ侍ける

よみ人しらす

いまはとも いはさりしかと やをとめの
 たつやかすかの ふるさにと かへりやくると
 まつちやま まつほとすきて かりかねの
 くものよそにも きこえねは われはむなしき
 たまつさを かくてもたゆく むすひをきて
 つてやるかせの たよりたに なきさにきある
 ゆふちとり うらみはふかく みつしほに
 そてのみいとゝぬれつゝそ あともおもはぬ
 きみにより かひなきこひに なにしかも
 われのみひとり うきふねの こかれてよは

129オ

129ウ

130オ

わたるらん とさへそはては かやり火の
くゆるこゝろも つぎぬへく おもひなるまで
をとつれす おほつかなくて かへれとも
けふ水くきの あと見れは ちきりしことは
きみも又 わすれさりけり しかしあらは
たれもうぎ世の あさつゆに ひかりまつまの
身にしあれば おもはしいかて とこなつの
はなのうつろふ あきもなく おなしあたりに
すみの江の きしのひめ松 ねをむすひ
よゝをへつゝも しもゆきの ふるにもぬれぬ
なかなりなむ

圓融院御時大將はなれ侍てのち

ひさしくまいらてそうせさせ侍ける

東三条太政大臣

あはれわれ いつゝのみやの みや人と
そのかすならぬ 身をなして おもひしことは
かけまくも かしこけれとも たのもしき
かけにふたゝひ をくれたる ふたはのくさを
ふくかぜの あらきかたには あてしとて
せはきたもとを ふせきつゝ ちりもすへしと
みかきては たまのひかりを たれか見む
とおもふこゝろに おほけなく かみつえたをも131ウ
さしこえて 花さくはるの みやひとゝ
なりし時はゝ いかばかり しけきかけとか
たのまれし すゑのよまでと おもひつゝ

130ウ

131オ

こゝのかさねの そのなかに いつきすへしも
ことてしも たれならなくに をやまたを
人にまかせて われはたゝ たもとそをつに
みをなして ふたはるみはる すくしつゝ
その秋冬の あさぎりの たえまにたにも
とおもひしを みねのしら雲 よこさまに
たちかはりぬと 見てしかは 身をかきりと
おもひにき いのちあらはと たのみしは
人にをくるゝ なゝりけり おもふもしるし
やまかはの みなしもなりし もろひと
うこかぬぎしに まもりあけて しつむみくつの
はて／＼は かきなかされし かみなつき
うすき氷に とちられて とまれるかたも
なぎわふる なみたしつみて かそふれは
ふゆも三月に なりにけり なかきよな／＼
しきたへの ふさすやすます あけくらし
おもへとも猶 かなしきは やそうち人も
あたらのためしなりとそ さはくなる
ましてかすかの すきむらに いまたかれたる
えたはあらし 大原野邊の つほすみれ
つみをかしある ものならは てるひも見よと
いふことを 年のをはりに きよめすは
わか身そつめに くちぬへき たにのむもれ木
春くとも さてやゝみなむ としのうちに
はるふく風も こゝろあらは そでの氷を

132オ

132ウ

133オ

とけとふかなむ

これか御返たゝいなふねのとおほせ
られたりければ又御返し

いかにせむわか身くたれるいなふねの
しはしはかりのいのちたえすは

拾遺和謠集卷第十

神樂哥

さかきはにゆふしてかけてたかよにか

神のみまへにいはひそめけん

さかきはのかをかくはしみとめくれは

やそうち人のまとゐせりける

みてくらにならましものをすへ神の

みてにとられてなつさはましを

みてくらはわかにはあらずあめにます

とよをかひめのみやのみてくら

あふさかをけさこえくれはやまひとの

ちとせつけとてきれるつゑなり

よもやまの人のたからとするゆみを

神のみまへにけふたてまつる

いその神ふるやおとこのたちもかな

くみのをしてゝみやちかよはん

しろかねのめぬぎのたちをさけはきて

ならのみやこをねるやたかこそ

わかこまはやくゆかなむあさひこか

やへさすをかのたまさゝのうへに

133ウ』

134オ』

134ウ』

585

さいはりにころもはそめむあめふれと
うつろひかたしふかくそめては

586

しなかとりあなのふしはらとひわたる
しきかはねをとおもしろきかな

587

すみよしのきしもせさらむものゆへに
ねたくや人にまつといはれむ

ある人のいはく住吉の明神のたくせんとそ135オ』

右兵衛督高遠賀茂になぬかまうてける

はての夜ゆめにみやしろよりとてちはや

きたるをうなのふみをもてまうてきた

りけるをあけて見侍ければかくかきて侍

けるそのゝち大貳になりて侍ける

ゆふたすきかくるたもとはわつらはし

ゆたけにとけてあらむとをしれ

すみよしにまうてゝ

安法々師

135ウ』

少佳上
あまくたるあら人かみのあひをひを

おもへはひさしすみよしの松

恵慶法師

590

われとはゝ神よのこともこたへなむむかしをしれるすみ
よしの松

はこさきをみ侍て

重之

591

いくよにかかたりつたへむはこさきの

まつのちとせのひとつならねは

源遠古朝臣こうませて侍けるに

もとすけ

592

おひしけれひらのゝはらのあやすきよ
こきむらさきにたちかさぬへく

ひえのやしろにてよみ侍ける

僧都實因

593

ねきかくるひえのやしろのゆふたすぎ
くさのかきはもことやめてきけ

恒徳公家障子

源 兼澄

594

おほよとのみそきいくよになりぬらん
神さひにたるうらのひめまつ

栗田右大臣家の障子にからさきには

らへしたる所にあみひくかたかける所

平 祐挙

595

みそきするけふからさきにおろすあみは
神のうけひくしるしなりけり

題しらす

人 まろ

596

万

ちはやふる神のたもてるいのちをは
たれかためになかくとおもはん

ちはやふる神もおもひのあれはこそ
としへてふしの山もゝゆらめ

安和元年大嘗會風俗なからの山

大中臣能宣

597

137
ウ

598

君かよのなからのやまのかひありて
のとけきくものゐる時そみる

さゝなみのなからのやまのなからへて
たのしかるへき君かみよかな

599

いはくらやま よみ人しらす

600

うきなきいはくらやまに君か代を
はこひをきつゝちよをこそつめ

みかみのやま よしのふ

601

ちはやふるみかみのやまのさかきはゝ
さかえそまさんすゑのよまてに

よみ人しらす

602

よろつよのいろもかはらぬさかきはゝ
みかみの山におふるなりけり

もとすけ

603

よろつよをみかみの山のひゝくには
やすかはの水すみそあひにける

おほくら山 よしのふ

604

みつきつむおほくら山はときはにて
いろもかはらすよろつよそへむ

みおやま よみ人しらす

605

たかしまやみおのなかやまそまたてゝ
つくりかさねよちよのなみくら

かゝみやま よしのふ

606

みかきける心もしるくかゝみやま
くもりなきよにあふかたのしさ

138
ウ

136
ウ

137
ウ

136
ウ

138
ウ

607 まつかさき 清原元輔
ちとせふる松かさきにはむれぬつゝ
たつさへあそふ心あるらし

おもものゝはま

かねもり

少佳上

608 とゝこほる時もあらしなあふみなる
おもものゝはまのあまのひつきは

天祿元年大嘗會風俗千世能山

よしのふ

609 ことしよりちとせの山はこゑたえす
君かみよをそいのるへらなる

いやたかの山 かねもり

610 あふみなるいやたかやまのさかきにて
君かちよをはいのりかさらむ

みかみの山 よしのふ

611 いのりくるみかみの山のかひしあれは
ちとせのかけにかくてつかへむ

いはくらやま

612 けふよりはいはくら山によろつよを
うきなくのみつまんとそおもふ

かゝみやま 中 務

613 よろつよをあきらけくみむかゝみやま
ちとせのほとはちりもくもらし

おほくらのさと

かねもり

614 としもよしこかひもえたりおほくにの
さとたのもしくおもほゆるかな

140才

よしたのさと

615 なみたてるよしたのさとのつえなれば
つくともつきし君かよろつよ

いつみかは

616 いつみかはのとけきみつのそこ見れば
ことしはかけそすみまさりける

まつかさき

617 つるのすむまつかさきにはならへたる
ちよのためしを見るなりけり

140才

延長四年八月廿四日民部卿清貫か六

十賀中納言恒佐妻し侍けるときの

屏風にかくらす所のうた

つらゆき

618 あしひきの山のさかきはときはなる
かけにさかゆる神のきねかな

たひにてよみ侍ける

人まろ

619 おほなむちすくなみかみのつくれりし
おもて

万 いもせの山を見るそうれしき

延喜廿年亭子院のかすかに御幸の

侍けるにくにのつかさ廿一首の哥よみて

たてまつりけるに

藤原忠房

少佳上

めつらしきけふのかすかのやをとめを

神もうれしとしのはさらめや

この集順教御房にこまかに

よみきかせまいらせ候ぬ

判

斯集雖有一部書写之志老病

右筆不合期之間上帖之内第一第

二第十等染愚筆其外所用他

筆也但於其說者傳受之分無

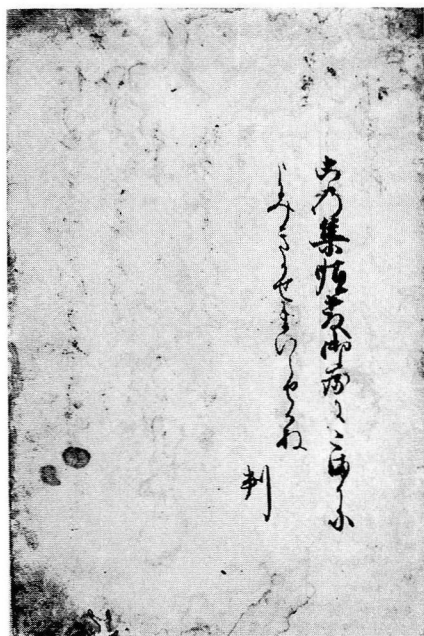
所殘所奉授糟屋賢郎也

桑門寂恵（花押）

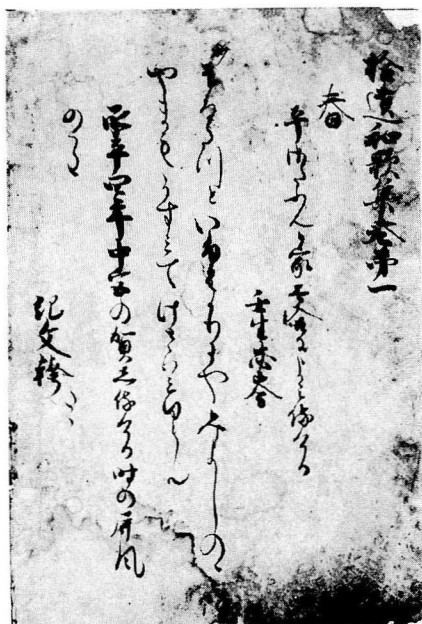
〔白紙〕

〔白紙〕

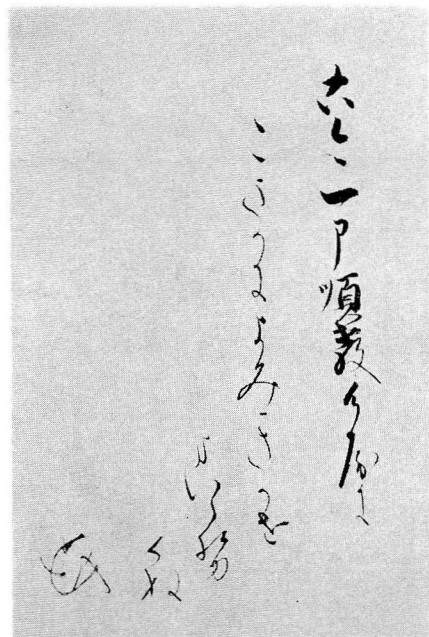
141
ウ』142
才』142
ウ』143
才』143
ウ』



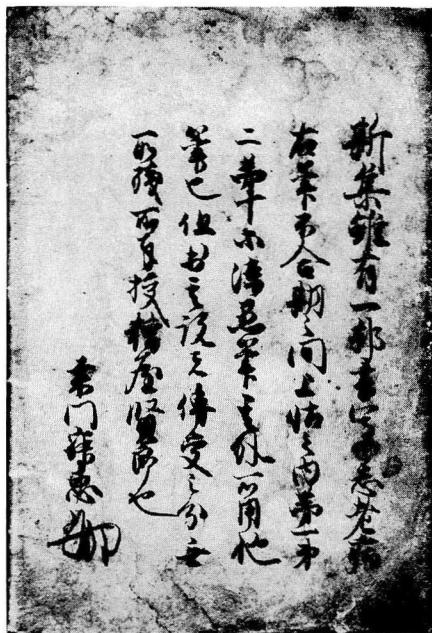
口絵2 寂恵本拾遺和歌集(第142丁オ)



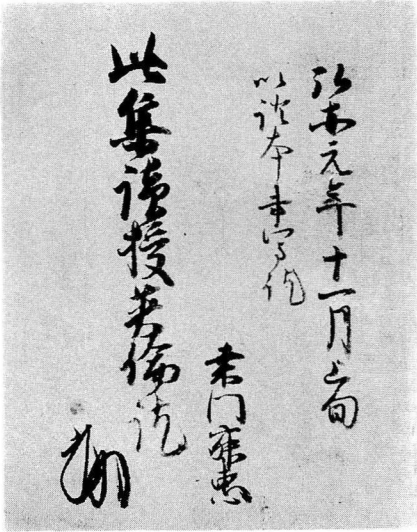
口絵1 寂恵本拾遺和歌集巻頭(第1丁ウ)



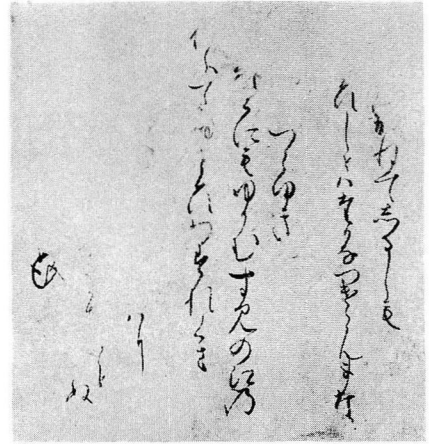
口絵4 寂恵本古今和歌集上巻末



口絵3 寂恵本拾遺和歌集奥書(第142丁ウ)



口絵 6 寂恵本古今和歌集下巻末奥書



口絵 5 寂恵本古今和歌集下巻末